

さん じょう し
山城志 第8集

備陽史探訪の会古墳城郭研究部会紀要

1985・8

目 次

正福寺裏山古墳群について ——墳形と位置関係——	山口哲晶……………	1
備南中世山城跡の現状 I 《シリーズ・備南の古墳》 ——迫山第1号古墳——	福山ユースドマップクラブ 佐藤一夫……………	5 12
明王院五重塔の相輪伏鉢陰刻名について	提勝義……………	14
異聞明智山城私考	後藤匡史……………	15
神辺城主山名理興の出自	田口義之……………	18
備後神辺城主杉原盛重 《シリーズ・生活の歴史を探る》 ——(1)畳表の今昔——	森本繁…………… 瀬戸洋子……………	21 29
《シリーズ・備後の山城》 ——(1)九鬼城跡——	城郭研究部会……………	30
御調の地名と山城 ——短歌——	住貞義量…………… 須磨……………	32 34
囚人遠藤弁蔵	平井隆夫……………	35
三原史跡めぐり “失われた遺跡への哀愁・古を偲ぶ” その1 山陽街道に沿って(3)	末森清司……………	40
〔図版〕 世羅郡甲山町・鳳林寺中世墓石群		巻頭

発刊によせて

備陽史探訪の会々長 神谷和孝

此度、備陽史探訪の会の会誌「山城志」第8号を発刊し、皆様に読んでいただけることになりました。

平素より当会の活動の内容や、活動の主旨については、あたたかい御理解をいただき、会の活動に力を添えていただいている事に対しまして、この紙面をかりて、厚くお礼申し上げます。本会の活動の中心になっている会員、とりわけ、20代後半から30代の前半の男子の会員が、好きで、よく使う言葉の中に「草莽」と言う言葉があります。「草莽」と言う言葉を辞書でひいてみますと「雑草」とか「在野」とか言う意味を持っています。辞書で「草莽」の意味を知って、私達の会自体が「草莽」と言うにふさわしい会ではないかと言う気持が、胸中に湧いて参りました。

私達会員の殆んどが、歴史とは縁のない仕事を持ちながら、また、既存の公の歴史の学会に属さず、胸中の歴史に対する関心を何らかの形で顕わした、と麗って当会に集ってきた者です。

その人達の、自分の足で歩き、確かめた内容をまとめたものを、なんとか冊子とし、活字であらわしたいとの願いが、この「山城志」となってあらわれました。

どうぞ、一読下さったうえで、御批判を下されば幸いです。その御批判こそが、当会への温かい激励だと思っているからです。

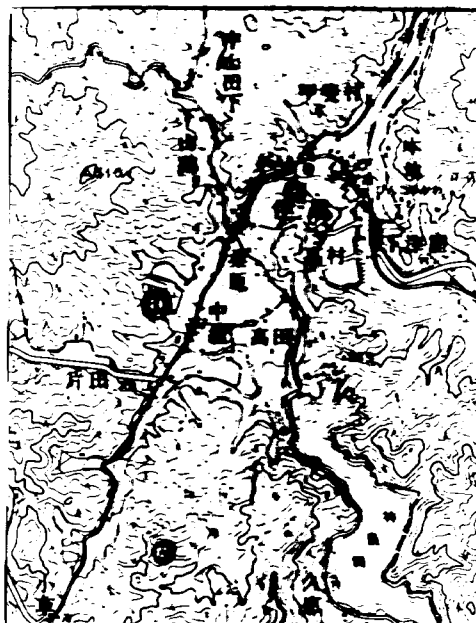
また、当誌に、花を添えていただきました先生方にも、後になりましたが、心中より御礼申し上げます。



＜図版解説＞

備後各地には中世の山城主に関連した墓石が多く残されています。

今回御紹介するのもその一つで、世羅郡甲山町伊尾597の禅宗鳳林寺境内に所在するものです。湯浅氏は寺の東方に位置する尾首山城主、下見氏は南方にそびえる鳶ヶ丸城主と伝わっています(『芸藩通志』)。

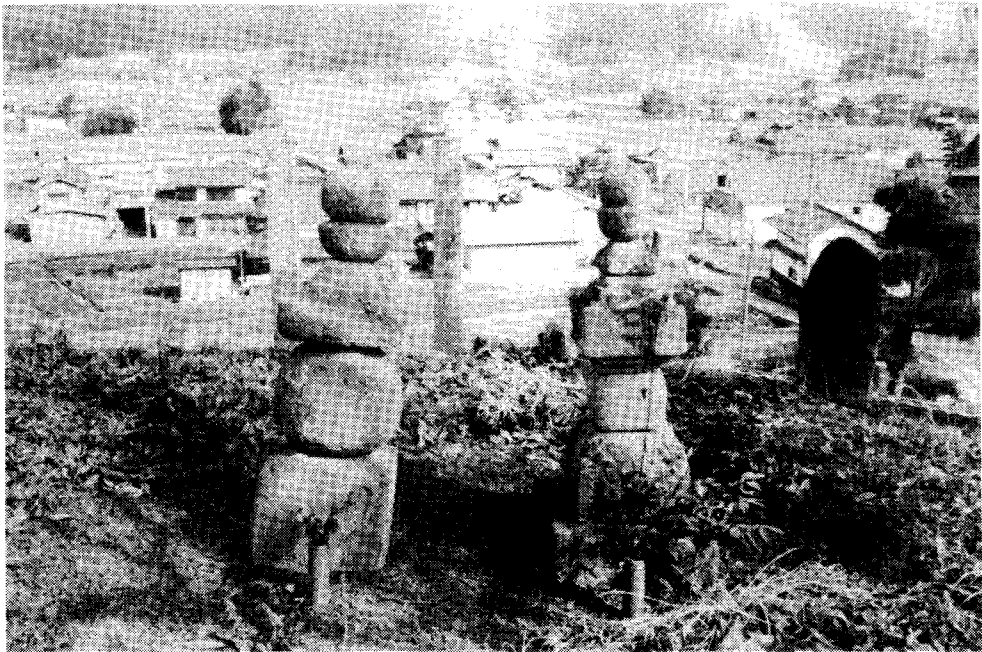


鳳林寺附近

- ①鳳林寺 ②尾首山城跡 ③鳶ヶ丸城跡



鳳林寺中世墓石群（伝湯浅氏墓）



同 上（伝下見氏墓）

正福寺裏山古墳群について

墳形と位置関係

山口 哲 晶

1 はじめに

正福寺裏山古墳群について、名称のみは周^{あま}た知られている事は事実である。しかしながら福山市史には

「③正福寺山前方後円墳

山腹の稜線に存在し、二基上下に位置し、1基は後円部の直径12m・高さ5m・前方部共に長径21m・他の1基は後円部直径15m・高さ5m・長径25mで表面は葺石におおわれて埴輪円筒片が散在している。かつて上方の1基の後円部から直刀片、土師器等が採集され、竪穴式か、箱式棺風の石室が所在したと土地の人は伝えている。」

と記載されているだけで、位置についての詳細は把握し難く、又、墳形についても前方後円墳と記載されているにも拘らず、円墳とする人々も多く、墳丘の測量図のない現在に於て明確に前方後円墳と断定し難い状況である。そこで、当会古墳研究部会独自で正福寺裏山

1号墳の地形測量を行い、次の様な測量図が得られたのでここに報告し、この測量図をもとにして墳形について考えてみたいと思う。合わせて、当古墳群内に於ての位置関係についても考えてみたい。

尚、地形測量には昭和59年9月8日・9月9日・10月6日・10月7日の4日間を費し、篠原芳秀・田辺英男・山口哲晶・田口義之・山根弘人・棗田英夫・佐藤洋一・井川博文・安原誉佳・七森義人の相互協力で実施した。

2 位置と環境

正福寺裏山古墳群は、福山市加茂町下加茂中組の正福寺背後のほぼ南西から北東方向にのびる低丘陵上に存在するが、この丘陵からは標高88mと低いにも拘らず加茂平野を一望に見渡せる好所にある。

この古墳群からは、加茂川をはさんで平野の東丘陵側・東南の方向に、前期古墳で列石を持った円墳の石槌1号古墳・同2号墳⁽⁴⁾及び

5世紀前半より6世紀後半頃まで営まれた吹越古墳群⁽⁵⁾があり、さらに谷をはさんで北方には中野古墳⁽⁶⁾がある。これらの古墳群は全て当古墳群より視界に入る事ができる位置にある。又、当古墳群の背後の山稜には桑木



正福寺裏山古墳群遠景

古墳⁽³⁾・下加茂古墳群⁽¹³⁾・掛迫北古墳群⁽¹⁰⁾・さらに、
 竪穴式石室を2基持つ掛迫前方後円墳のある
 掛迫古墳群⁽¹¹⁾がある。さらに、当古墳群より北方の谷をはさんだ北側にも倉田古墳群⁽⁹⁾・内山
 古墳群⁽⁸⁾・終末期古墳の猪の子古墳等⁽⁷⁾が存在し、
 当古墳群の周囲は1大古墳群地帯となっている。

かは確認できなかったが、現在墳頂部にくぼ
 みが残り、周囲に数個の石材が散乱している。
 尚、くぼみの周囲をトレンチ棒にて探査をし
 てみると、未だ地表面下に石材が埋っている
 可能性も考えられる。^①

出土遺物については、石室内より刀・朱の
 入った壺が出土したという。しかしながら両

出土品は現在
 行方不明の為
 確認までに至
 らなかった。
 尚、本古墳の
 丘陵中腹部よ
 り灰色の焼物
 が出土したと
 いう事で、お
 そらく須恵器
 の類であろう
 が、本古墳と
 の関係は不明
 である。^②

()内の番号は
 地図上の番号
 をさす。

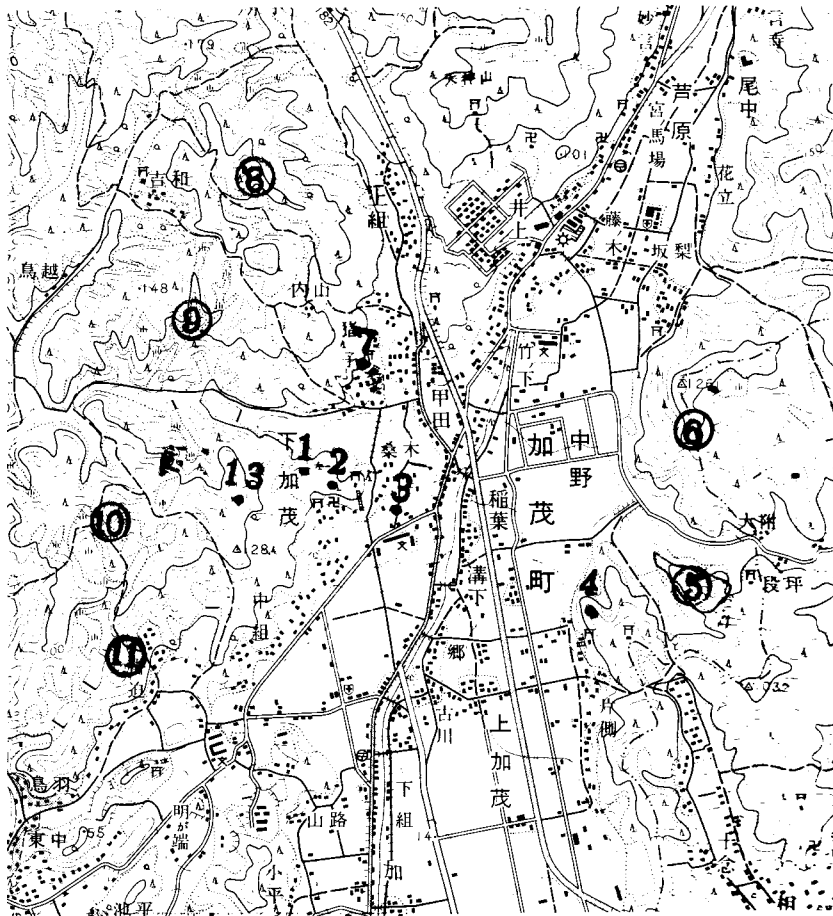


図1 加茂平野古墳分布図

3 内部主体と出土遺物について

正福寺裏山1号墳の発見の経緯について、
 正福寺住職渡辺達磨氏によれば、大正の終り
 頃、石工が石材を取り出そうとして掘り起し
 てみると、中に茶色に変色した人骨があり、
 古墳と判明したとの事である。

主体部の形態については残念ながら記憶が不
 鮮明の為、竪穴式石室なのか、箱式石棺なの

4 位置関係について

福山市史によれば、「2基上下に位置し…
 …(省略) 他の1基⁽²⁾号墳)は後円部直
 径15m・高さ5m・長径25mで表面は葺石に
 おおわれて埴輪円筒片が散在している。」と
 している。

ところがここに、合の坪前方後円墳という古
 墳がある。府中高校出身の近藤正氏が発見し

たとあり、位置は加茂町小字合の坪で、倉大明神の本殿の西北西200m・標高60mの丘陵上にある。前方部を東に、後円部を西に向け、全長29.7m・後円部径18.8m・高さ2m・前方部幅4.3m・高さ1.1mの前方後円墳で、葺石と埴輪片が散布している^④。

この両古墳の数値の違いは、両者ともに略測の為に正確さを欠き、違いを生じたものと思われるが、葺石、埴輪片が存在するという特長が一致し、位置についても、地元の児玉光正氏によれば、正福寺裏山2号墳の位置の他には古墳はなく^⑤。その位置に合の坪前方後円墳があり、後円部の南側に河原石の石列が存在しており、墳丘の北側を往時道が通っており、その道の形状から前方後円墳であったことを指摘された。又、河相清人氏も同様の事を指摘された。

以上の事より、正福寺裏山2号墳と合の坪前方後円墳とは同一の古墳と考えた方がよさそうである。そうすると、同一古墳に2つの名称が重複しては混乱を招きやすい結果となり、統一された名称を与える事が急務である

と考える。そこで当地の小字名である合の坪前方後円墳と新たに命名することをここに提案したい。

5 墳形について

正福寺裏山1号墳を前方後円墳と考えるならば、主軸を南西より北東に向けた位置になる。ところが尾根の地形から北東方向にある前方部と後円部とのくびれ部と思われる箇所を線を結んでゆくと、前方部の形態が著しく変形し、かつ、主軸方向が後円部の中心と交わらなくなってしまい、例え雨等の自然崩壊が著しいとしても疑問を残さざるを得ない。又、前方部先端の地形に於てもなだらかに斜面が落ちてゆくのみであり、多少の勾配はあるものの前方部の地形とは言い難く、自然地形と考えた方がよいように思われる。

以上の事から、前方後円墳とするにしても自然条件を最大限考慮するとして、にわかには否定し難いが、肯定できる積極的な理由はない。ただし、帆立貝式前方後円墳とすると可能性は考えられなくもないが否定的である。

この地形測量図をもとに、現在の時点で考えられる事は、丘陵頂部に築かれた円墳とするのが妥当の様に思われる。

最後に、地元の正福寺住職渡辺達磨氏・児玉光正氏・河相清人氏の各氏より有益なる御教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

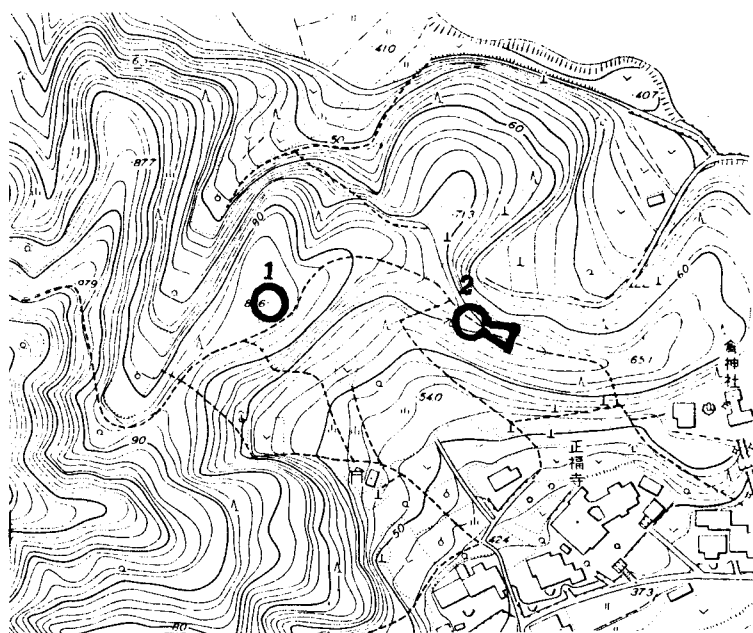


図2 正福寺裏山1号墳と合の坪古墳の位置関係 1:2500
(1.正福寺裏山1号墳, 2.合の坪古墳)

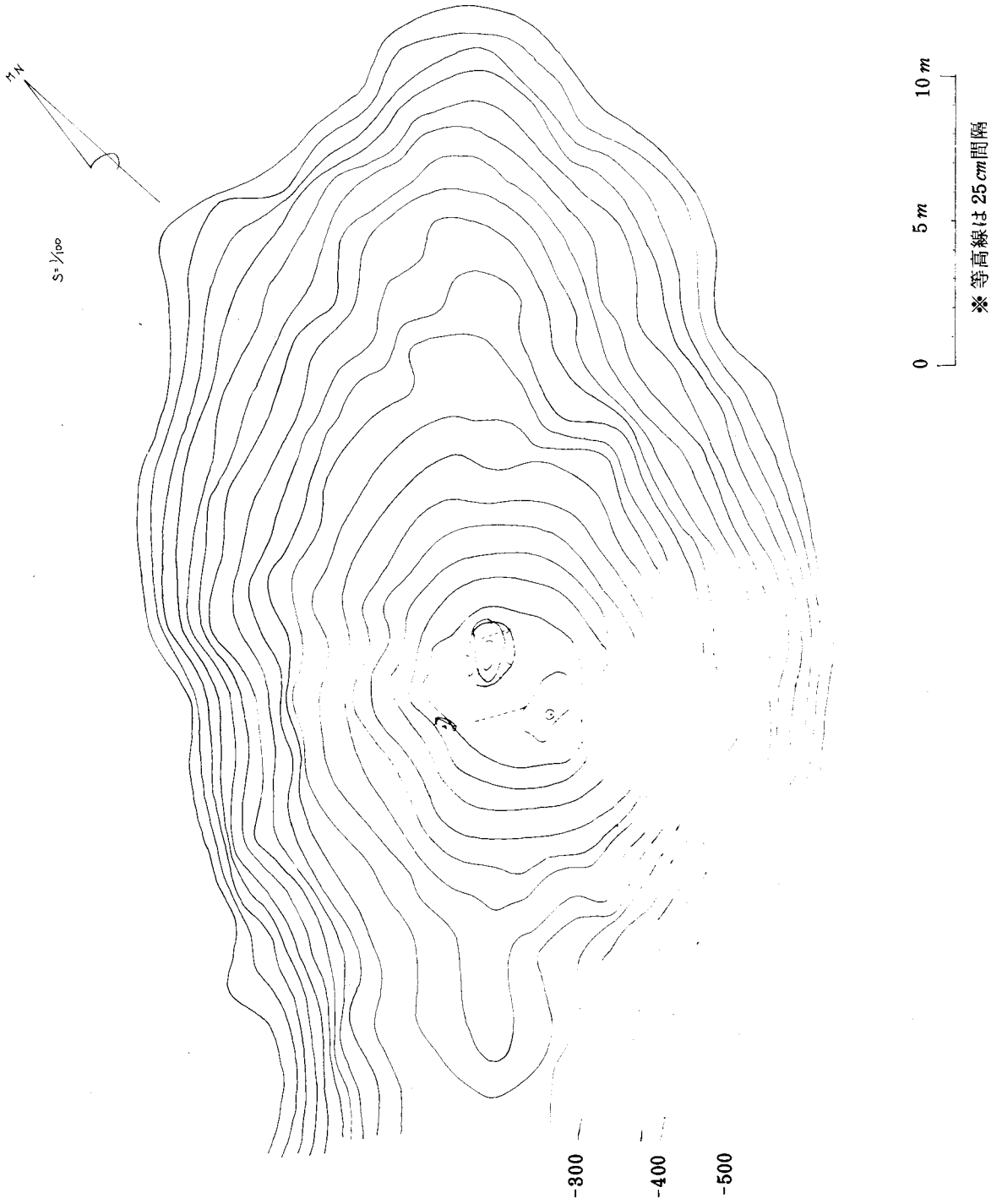


図 3 正福寺裏山 1 号墳墳丘実測図

<注>

- ① 測量図参照
- ② 正福寺住職の話によると、昔寺の屋敷内に小社があり、そこを開墾すると土器が沢山出土したとの事である。
- ③ 筆者注
- ④ 『古代吉備品治国の古墳について』
広島県立府中高等学校地歴部
一昭和42年一
- ⑤ 児玉光正氏によると、以前正福寺1号墳に①、合の坪前方後円墳に②、さらにその東側、倉神社の真上の位置の平坦地に③という札があったという。そこも古墳の可能性が残されている様である。
(引野町2-328)

備南中世山城跡の現状 I

1973年7月

我々は1972年2月から1年間にわたって福山市内の主要山城跡の現状と保存状態に関する調査を行ってきた。以下はその報告である。この報告が地方史研究の一助になればと思っている。猶、調査器材は巻尺を使用し、1000分の1略測図を作成した。

<本編収録城跡及び調査日時>

1. 大場山城跡 1972年2月27日
2. 別所城跡 1973年3月22日
3. 甲谷城跡 1972年4月2日
4. 銀山城跡 1972年3月21日

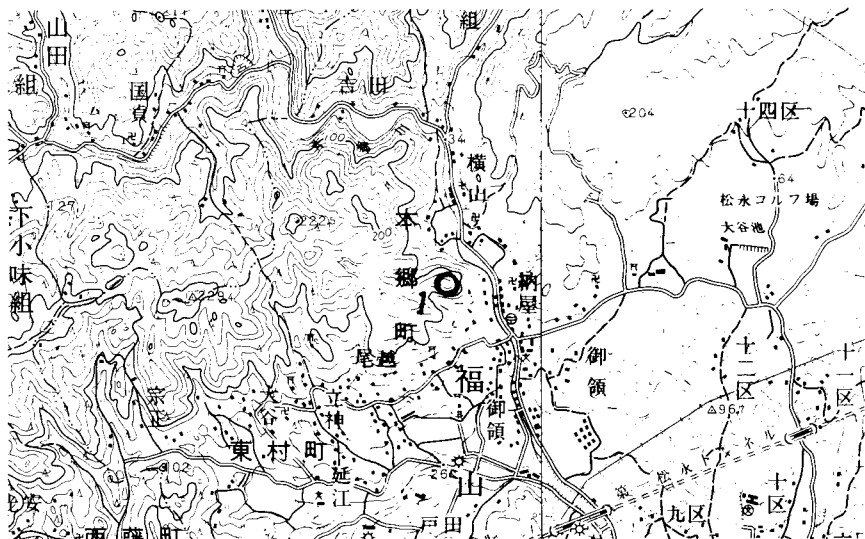
福山ユースドマップクラブ

- 田口義之 盈進高校3年
岡内讓二 福山工業高校3年
七森博明 近大附属福山高校3年
関戸和典 同上
猪原進 盈進高校3年
松本信二 県立松永高校3年
柏原正尚 盈進高校3年
村上誠之 同上
三島吉晴 同上
(顧問)
神谷和孝 近大附属福山高校教諭

1. 大場山城跡(図1)

(所在地) 福山市本郷町

※図は9.10ページ



地図① 大場山城跡附近(1:5万尾道・福山)

又、この附近に城下からの登山道が達していた様子である。二の丸との高低差は2.8m。

ホ 三の丸帯郭Bの東側に高低差1mで接している、東西18m、南北33mの長方形の平坦地で、中央よりやや北西に

(1) 現状

城山と呼ばれる海拔152mの山上に5段の平坦地が存在する。

イ 本丸(仮称、以下同じ)山頂に位置する東西88m、南北12~18mの平坦地。西端に高さ3m、巾5m(底面)の土塁が存在する。又、東面及び北西と南面の一部には石塁が遺存している。石塁の状態はきわめて良好であるが、石は直径20cm位の小さいものである。他に土塁から東へ17mの所に径3m位の巨岩が露出し、岩と土塁との間に小さな池がある(城の用水か)。

ロ 帯郭A 本丸の北側に接して長さ58mにわたって巾10m~4mの平坦地が存在する。今その仮称を帯郭Aとする。

ハ 二の丸 本丸の東側に一段下って存在する、東西8m、南北15.5mの平坦地。東側の一部に石塁が残存している。なお、この平坦地は北西端で帯郭Aとつながっている。本丸との高低差は3.8mである。

ニ 帯郭B 二の丸の北側から南側にかけて存在する長さ35m、巾8~3mの細長い平坦地。帯郭Aとは傾斜面でつながっている。

井戸跡が存在する。

ヘ 東の丸 三の丸の東北に高低差10mをへて、西北・南東21m、東北・南西9mの平坦地がある。この平坦地は南北両端が空堀によって画されており、その北側のものはその底を通路として利用したと思われる、巾4mを計る。この空堀底の道は上述した帯郭傾斜面につながるものと考えられる。

ト 登城道、本丸北端の城門跡と考えられる所から、上述のように帯郭傾斜面を通り、三の丸北端の空堀底を通して城下大手に通じていたものと思われる。しかし、三の丸附近より下は判然としない。なお、現在の登山道は戦時中、山上を開墾した時に作られたものである。

(2) 保存状態

きわめて良好であり、中世山城の形状を良く残している。史跡指定が望まれる。

(3) 城主

室町、戦国時代、在地豪族の古志氏が居城したと伝える。

◎ 城跡に関連する文書

『毛利興元感状』（西備名区所収）

九月十日備後國古志城切崩 抽戦功候神妙之至也 仍為後証 感状如件

永正九年（1512）

九月十六日 興元（花押）

福原宗左衛門尉殿

※ 古志城…大場山城を指すと思われる。古志氏が居城したため、当時そう呼ばれたのであろう。

2. 別所城跡（図2）

（所在地） 福山市瀬戸町

（1）現状

瀬戸池の西方500mに位置する標高89mの小山を利用した山城跡で、城の要部は山頂を中心に南北方向3つの部分に分けることができる。猶、我々が略測したのは中央部分（中の丸）だけである。

イ 中の丸 標高89mの山頂に位置し、山頂の東西53m、巾20～12mの平地を中心に、その西方一段下った長さ16mの平地（西ノ段）、及び南側の二段の帯郭からなっている。猶、西ノ段には石塁が残存している。

ロ 南の丸 中の丸から谷をへだてた南方丘陵上の部分で、その山頂から北面して三段の平地が存在し、西側の所々に石塁が残存している。又、井戸跡二ヶ所（一段と二ノ段）、及び中世城跡には珍らしく城門の礎石が残っている。しかし、東側は碎石場となり破壊が著しい。

ハ 北の丸 中の丸北側の低く延びた尾根上に南北60～70m、巾10～20mの平地が存在する。城主の館跡の可能性が考えられる。

（2）保存状態

碎石場のために東側が破壊されているが、城門の礎石等中世城跡には珍しい遺構が存

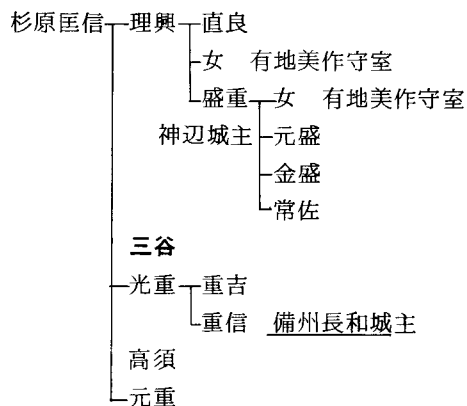
在し、保存のための対策が望まれる。

（3）城主

中世、この附近を支配した土豪三谷氏の居城と伝える。

『三谷氏系図』（萩藩閥閥録143による）

山手銀山城主



※備州長和城……当城のことと思われる

3. 甲谷城跡（図3）

（所在地） 福山市熊野町

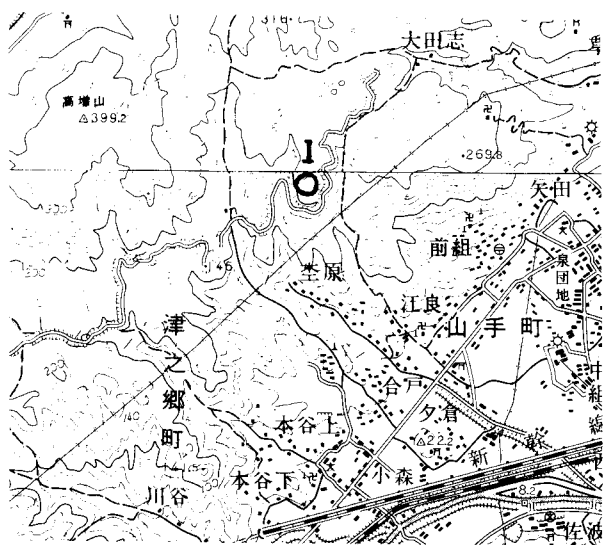
（1）現状

熊野町六本堂の東、光林寺池の北側に所在する中世山城跡で小規模ながら良くまとまっている。

イ 本丸 山頂に存在する二段に分れた平地で東側は高さ約2mの土塁によってかこまれている。上段は東西13m、南北15m、下段は長さ25.6m、巾33mで、高低差は約50cmである。

ロ 二の丸 本丸の西側に高低差6mをへて三段の平地が存在する。上段6×13m。中段3×5.5m。下段6×13m。

ハ 三の丸 二の丸より西方に50m下ったところにある長さ6m、巾13mの平地、この南端に城門があったようである。



地図③ 銀山城跡附近(1:5万福山・井原)

在する。一ノ段は東西30m、南北15mのダ円形の平坦地で二の丸の最高所にあたる。本丸との高低差は約10mで空堀(巾5m、深さ2m)によって本丸と画されている。この空堀は底を道として利用したと考えられ、堀底は小道となって三ノ段(本丸)に通じている。二ノ段、三ノ段は各々10×15m、10×7mの半円型の平坦地。四ノ段は巾19mの帯郭状の平坦地で、一、二、三ノ段の南側を囲んでいる。又、この段の南側には7mにわたって野面積の石塁が残っている。五、六、七、八ノ段は各々6×22m、14×4m、5×2m、15×2mの三日月型の平坦地である。猶、各段の高低差は2～3mである。

ハ 北面 本丸北側は、一ノ段の北に堀切りが存在したと思われるが現状ではそれを確認することはできない。本丸から10m下って巾10m位の平坦地が北方に続いている。

ニ その他 本丸一ノ段の西側に一ヶ所、三ノ段の南西にも空堀をへて二ヶ所の平坦地が存在する。ただし、略測は行っていない。

(2) 保存状態

きわめて良好である。又、歴史的、城郭史的価値も大きいと思われ、史跡指定が望まれる。

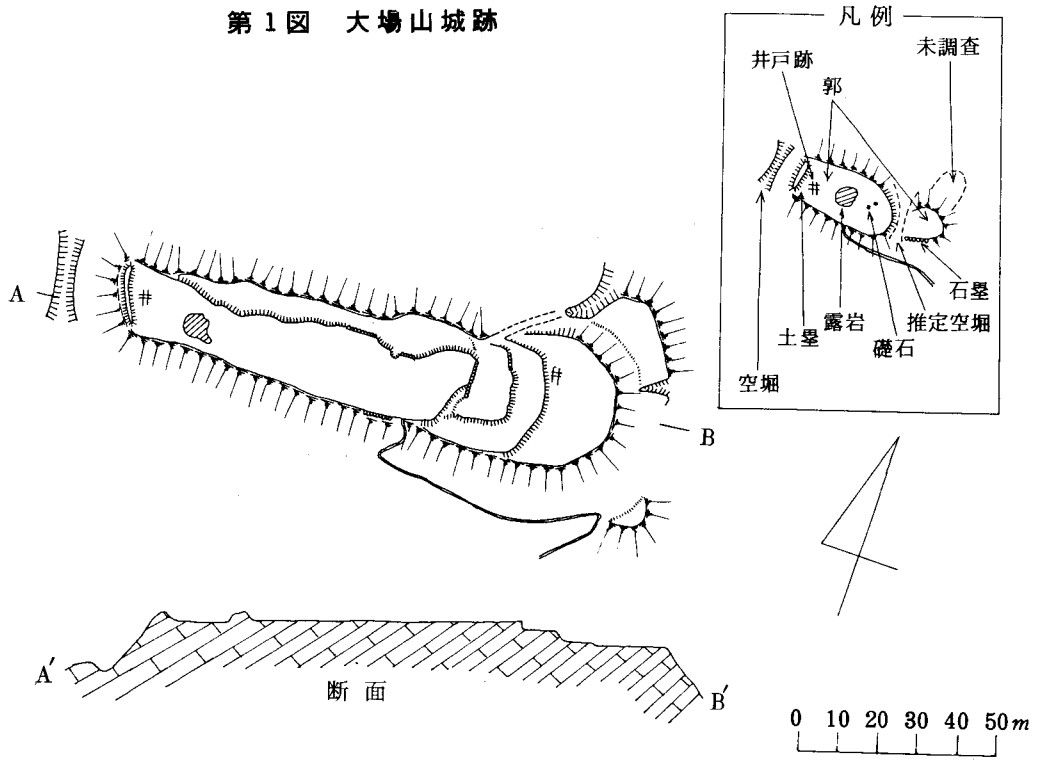
(3) 城主

中世、備南で最も有力な豪族杉原氏の居城と伝える。戦国時代、当城主であった杉原理興、同盛重はのちに神辺城主となり、備南の盟主的存在となった。

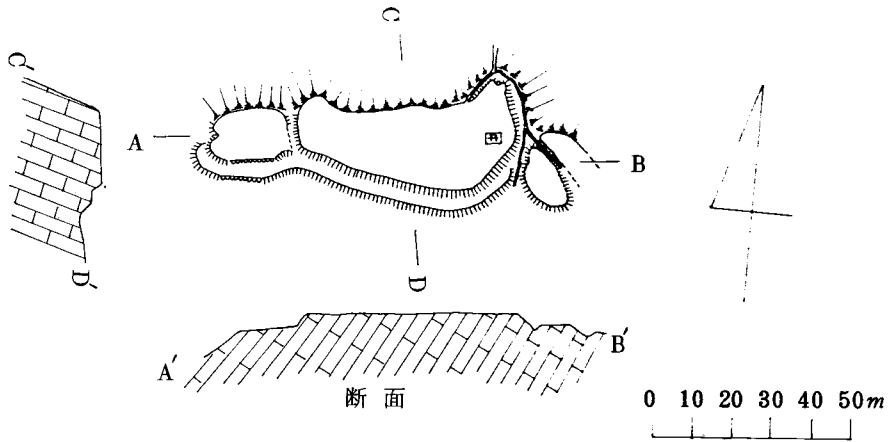
(文責 田口 義之)

この報告は、1973年7月・ガリ版印刷にて調査参加者のみに配布したものの再録である。
(編集者注)

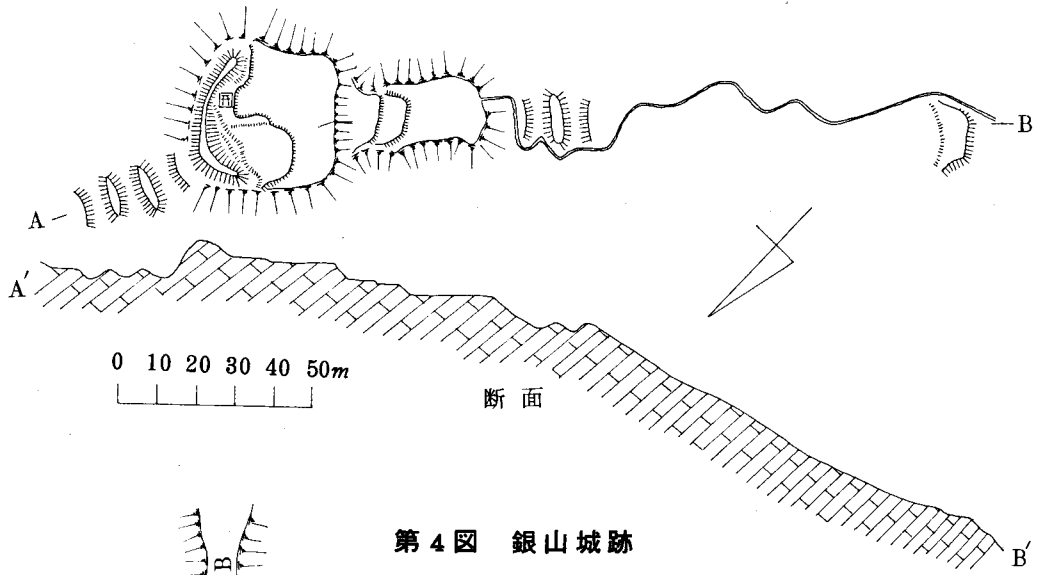
第1図 大場山城跡



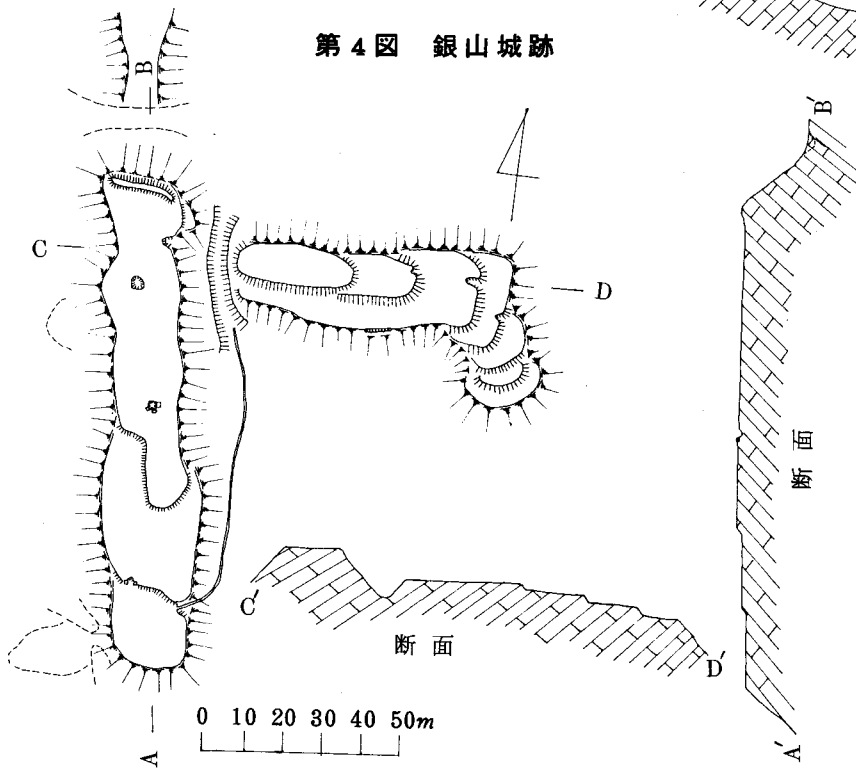
第2図 別所城跡中の郭



第3图 甲谷城跡



第4图 銀山城跡



(シリーズ) 備南の古墳(1)

迫山第1号古墳

佐藤 一夫

ここに紹介する迫山第1号古墳は、広島県深安郡神辺町大字湯野字迫山に所在する。当古墳は、標高84.2m、平地からの比高約60mの丘陵南斜面にあり、現在11基から成る迫山古墳群の盟主的な古墳である。

迫山古墳群は、現在11基の古墳が数えられるが、すでに何基かは消滅しているものと考えられる。古墳群の内部主体は、横穴式石室7基・箱式石棺2基・竪穴系石室1基・不明1基である。また、その構成をみると、丘陵頂部から南に延びる尾根上に第2号古墳(無袖式の横穴式石室)があり、この南方の眺望のきく位置にある第1号古墳から尾根は2方向に分れる。南南西に延びる尾根上には、第3号古墳(径1.5m、全長約6.8mの片袖式の横穴式石室)・第4号古墳(径1.2m、箱式石棺)・第5号古墳(径1.1m)・第6号古墳(箱式石棺)があり、南南東に延びる尾根には、第7号古墳(径1.3m、全長8.4mの無袖式の横穴式石室)・第8号古墳(横穴式石室)・第9号古墳(径1.9m、全長1.1.6mの片袖式の横穴式石室)・第10号古墳(全長3mの竪穴系石室)・第11号古墳(横穴式石室)がある。このように、迫山古墳群は横穴式石室ばかりでなく、箱式石棺・竪穴系石室を内部主体とするものもあり、複雑な様相を示すとともに、第1・3・7・9号古墳のように石室規模に注目すべき古墳がある。(第1図参照)

迫山第1号古墳は、1983年夏に神辺町教育委員会によって発掘調査が行われた。石室内の調査が主で、墳丘の調査が行われていないため不明であるが、墳丘は丘陵頂部より南に延びる尾根を断ち切り周溝とし、墳丘の東・西を含め整形し盛土したのと考えられ、直径約1.9m、高さ約5mの円墳である。

(第2図参照)

石室は、南南東に開口する片袖式の横穴式石室で、石室全長1.1.6m、玄室長6.4m、玄室幅2~2.5m、玄室高2.8~3m、羨道長5.2m、羨道幅1.6~2m、羨道高2mと推定されている。(第3図参照)

副葬品として、単鳳環頭大刀1・直刀2・

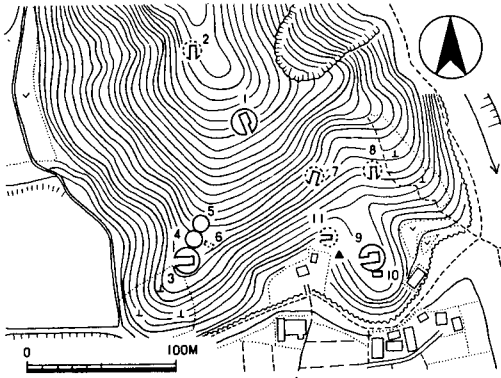
鉄鏃20・鉸具2・メノウ製勾玉1・水晶製切子玉2・メノウ製管玉1・棗玉1・ガラス玉17・土製練玉200以上・金環8・須恵器4・土師器3が出土している。出土した須恵器等より6世紀後半の末に築造されたと考えられ、3~4体の人骨から何度かの追葬がうかがえる。

さて、迫山第1号古墳は大型石室墳であり、単鳳環頭大刀を出土した点に特徴をもつ。石室規模は玄室空間容積・床面積を比較すると有効であるが、県内において容積では梅木平古墳(豊田郡本郷町)に次いで2位、床面積では梅木平古墳・康徳寺古墳(世羅郡世羅町)に次いで3位であり卓越した石室規模をもつものといえよう。芦田川流域の大型石室墳として、福山市駅家町の山の神古墳・宝塚・二子塚・二塚や福山市赤坂町のすべり石1号古墳がある。しかし、当古墳やすべり石1号古墳は群集墳内に位置し駅家町のそれは単独に築造されている。二子塚は全長6.8mの前方後円墳でもある。このことを考えれば、当古墳は駅家町の古墳と比べ政治的・経済的に低位であったといえよう。また、環頭大刀は県内で3例出土している。当古墳と釜谷1号古墳(福山市箕島町)・汐首古墳(芦品郡新市町)で、芦田川流域のみの出土である。環頭大刀は、畿内政権が政治的・経済的に地方勢力を取り込む過程で授与したものといわれ、それが駅家町周辺地域で出土しているのである。この点からも、芦田川流域における政治的支配体制の中に当古墳がどう位置づくのか、これからの研究が待たれるのである。

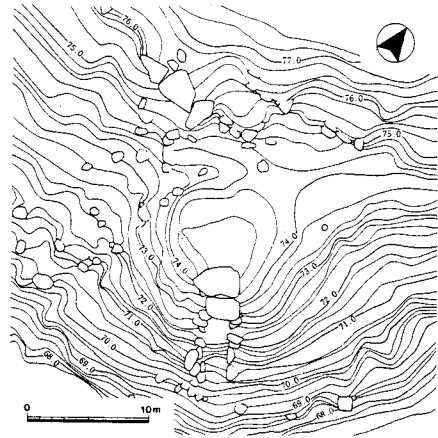
なお、当古墳出土資料ならびに実測図等は、神辺町立歴史民俗資料館に保管されている。〈参考文献〉神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅱ』1983

〈交通〉井笠バス福山一井原線「湯野口」下車。堂々川土手道を500m北上。交差する県道新市一御領線を300m西下。「青葉酒造」を右折し200m北上すると「町営グラウンド」がある。グラウンドに東接する丘陵が迫山である。

(福山市木之庄町40番地の3)

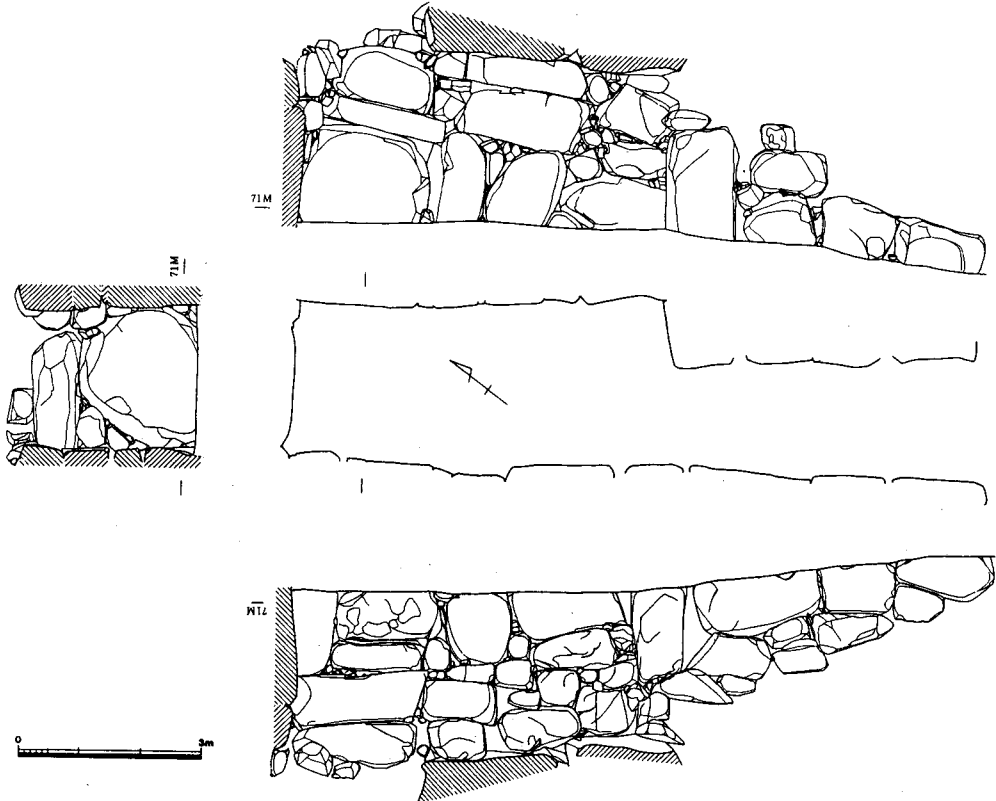


↑第1図 迫山古墳群配置図



↑第2図 迫山1号古墳地形測量図

↓第3図 迫山第1号古墳主体部実測図



(神辺町教育委員会『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1983より転載)

明王院五重塔の

相輪伏鉢陰刻銘について

堤 勝 義

塔（ストーパ）のことを調べていて、福山市史の上巻をみていたら、貞和4年（1348）の明王院五重塔の相輪伏鉢陰刻銘に次のような文があるのに気がついた。

右夫普為令
遂兜率上詣願望
結龍花下生來緣
積一文勸進小資
成五重塔姿大功
順送諸縁同利益

貞和4年戊子 12月18日

明王院の五重塔は、草戸千軒の人々や周辺の人々の小資によって建てられたものであると思われるが、建立の趣旨になったものが陰刻銘にかかっている弥勒上生信仰である。そこには、中世人の信仰の一端をみる事が出来るので、弥勒信仰について述べてみたいと思う。

弥勒信仰は、弥勒上生信仰と弥勒下生信仰にわけることができる。

弥勒上生信仰は、弥勒が仏になろうと、兜率天で修行しているのだけれども、釈迦の没後56億7000万年たった時に兜率天の寿命が尽きる。その時に弥勒は地上に下生する。仏になった弥勒は龍花樹の下で三度にわたって有縁の人々に説法をする。

人々は釈迦の説法を生きている時には聞くことが出来なかったし、又、今の世は末法の時であるので、救われることは難しい。それゆえ、死んだ後は、兜率天に上生して弥勒のそばで56億余年を過ごし、弥勒が下生する時に、弥勒に従ってこの地上に還って、龍花樹の下で、弥勒が三度説法（龍花三伝）するのを聞いて救われたいというのが弥勒上生信仰である。

弥勒下生信仰は、56億7000万年待っ

て、弥勒が下生して、龍花樹の下で説法するのを聞いて救われたいという考えと、56億7000万年待つのは大変なことだということで、極楽浄土で待っていて、弥勒が龍花樹の下で説法をする時に立ち会って救われたいという考え方があった。

弥勒下生信仰は、上生信仰も同じであるが、主として勸進僧によってすすめられたもので、埋経という方法によっておこなわれた。初期におこなわれた埋経の代表的なものは、藤原道長の金峰山の埋経である。比の埋経は、極楽浄土で待っていて、弥勒が下生して、龍花樹の下で説法する。その説法を聞いて救われたいという考えでおこなわれた。

埋経は、紙に経文（法華経）を書写して、埋経の趣旨をかいて、経筒に納めて地下に埋めるのが普通であって、瓦経、銅板経、柿経（こけらきょう）でもおこなわれて、広く一般的におこなわれたものである。

明王院五重塔建立のために勸進に応じて、小資を出した人々は、兜率天に上生して、弥勒の下生の時に、ともに下生して、龍花樹の下で説法を聞いて救われようとする人々であり、五重塔建立はめったになかったことであろうから、またとない機会であり、多くの人々が、小資を出すことに応じたのであろう。

弥勒上生信仰は、自力作善や齋戒して身を慎しまねばならなかったので、人々が作善や齋戒をなすのは大変なことである。しかしながら、弥勒下生信仰には、作善や齋戒をすることなく、経筒を埋経することによって出来るし、また、それすら出来ない者には、瓦に経をほったりして、埋経すればよかったのであるから、上生信仰に較べればより簡単におこなわれたのであろう。私達が博物館でよく見る経筒や瓦経等は、弥勒下生信仰によって

作られたものである。

以上のように、貞和4年(1348)に建立された明王院五重塔は、当時の浄土信仰と結びついて信仰されていた弥勒信仰にもとづいて、建てられたことが、陰刻銘によりわかるのである。

草戸千軒町や出入する舟から、明王院の五重塔は、真近にみえたであろうから、小資を出した人々は、死後に弥勒のいる兜率天にもなってくれる五重塔に、厚い信仰心をいただいていたであろうと思う。

(註) ① 順縁とは年をとったものから順々になくなっていく縁。

逆縁とは、若い者の方が、年をとった者よりも早くなくなっていく縁。

また悪の道から仏の道にはいっていく縁等。

(福山市民図書館)

異聞明智山城私考

後藤 匡史

福山市大門町、大門、野々浜と岡山県境に連なる明智山は、標高141メートル、以

前は揚知山とも、土隠山とも呼ばれていたこの明智山に、最初に城を築いたのは、南北朝

時代(1336~1392年)

あくら 鮑浦四郎左衛門尉である。

鮑浦氏の出自と云えば、備前児島郡、現在の岡山市児島である。

又、岡山県浅口郡六条院あくらに安倉と云う所(現在は寄島)ありという、この時代に鮑浦三郎左衛門尉信胤と云う人あり同族か?

その後、戦乱の度に城主は岡、河野、藤井氏と変わり、天正5年(1577年)廃城となり、近くの烏帽子山城、枝



光円寺より明智山を望む

広城も前後して廃城となった。

弘治2年(1556年)河野刑部左衛門尉光重は、それまで隣国備中有田の城主陶山弾正忠国時(この陶山氏と云うのは、鎌倉幕府北条氏打倒を叫び、元弘の変に、南朝後醍醐天皇が立籠る難攻不落と云われた笠置山城を、一族備中笠岡追分庵ノ子山城主小宮山某と共に、風雨の中、一夜にして、落城せしめ備中にその人有りと、うたわれた陶山藤三義高の曾々孫にあたる)に敗れ、光重の嫡子光円は、落ちのび、大門天台宗海雲寺を頼り、得度して仏門に入り、立円と号し、その後、修業を思い立ち、大阪に出て石山本願寺にて顕如上人(光佐)に帰依して、その弟子となったという。その頃、石山本願寺は、天下統一をめざす織田信長の攻撃を受けていた。光円も戦ったが利あらず、ついに石山本願寺は門を開いた。

しかし、顕如の子、教如は、光円の功績をたたえ、教如の1字を、もらい受け教円とし、

帰国して、海雲寺を廃し、津之下^{たわ}の畔に、一寺を建て、光円寺とし、その後慶長年間津之下現在の地に移転した。

そしてその後を受けて、明智山城には入ったのが藤井太郎左衛門好長、藤井氏と云えば備中正霊山城主藤井能登守皓玄がいて、永禄12年(1569年)一時神辺城を占拠したがその後、追われ大門に逃げて来たと言われている。

この皓玄の末弟に小坂信濃守利直がいるが、利直の娘が「お登久」(一説によると皓玄娘にて利直養女とも云われる)この頃、水野勝成が備中流浪の折、慶長2年(1597年)お登久に生ませたのが福山藩水野家二代勝俊である。勝成慶長19年(1614年)備後十萬石にて入封した時、藤井一門も輩下に加わっている。勝成の後室は備中成羽三村紀伊守親成の姪御珊にて香徳院、又お登久は良樹院と称し今、墓は福山市長者町浄土宗定福寺にある。

話は変わるが天正15年(1587年)烏帽子



大門町の史跡

山城跡に坪生庄（福山市坪生町）解体後の真中八幡社の分霊を勧請、五箇八幡（大門津之下、野々浜、引野、能島）を建立、そして、枝広城城山南麓真明寺（現在は廃寺）には、天正年中備中大下（大宜）大橋山城主高田河内守則義、陶山氏に敗れ当地に入り果てた。真明寺横の山裾に五輪塔が並んで建っている。それから、大門町野々浜、林にある谷尾神社は、以前は明智山中腹にあって藤井皓玄を祀っていたが、その後、大津野灣（水野家四代勝種が寛文7年（1667年）に開いた大津野新開）にて海難事故があいつぐので社殿を現在の地に移転したと云われる。

今、野々浜横道桐之本藤井、林は空藤井、津之下中西藤井、これら藤井各家がある。

現在明智山城址、その遺跡はまったくわからず生い繁る雑草に土地の人にも忘れ去られ様としている。

ちなみに福山市三吉町光明寺は、元亀3年（1572年）野々浜明智山城主河野一族藤間光重の子光明、祖先菩提のため、津之下月浜に建立（津之下光円寺、御領明正寺は光明の従者、山口隼人亮、室町十郎左衛門のそれぞれ出家草創とも云い、福山志料では、光円俗名万之丞、弟は幾三郎光明とする）八世教運寛永5年（1628年）東町三河野に遷し九世開靈正保年間三吉に遷る。西本願寺末寺（県史）……光円寺はお東、教円から教えて20代目。

◎ 水野勝成土着国人衆召抱之備中三村氏と藤井一門

備中成羽一三村紀伊守親成の子親良一族（勝成勤仕千石）

備中吉井正靈山一藤井能登守皓玄子孫靱負吉親（勝成勤仕六百五十石、一族三郎兵衛二百石）

大津野明智山一藤井太郎左衛門好長子孫覚左衛門吉之（勝成勤仕百五十石）

明智山城関係略年図

南北朝時代（1336年～1392年）	飽浦四郎左衛門尉明智山城築城す
明応9年（1500年）	岡志摩守景勝
弘治2年（1556年）	河野刑部左衛門尉光重、隣国備中有田城主陶山弾正忠国時に敗る
永祿12年（1569年）	藤井皓玄神辺城没落の後当地に来る
天正5年（1577年）	藤井太郎左衛門好長、明智山城廃城す、烏帽子山城、枝広城も前後して廃城す
天正年中	この頃備中大下（大宜）大橋山城主 高田河内守則義、備中笠岡陶山氏に敗れ大門真明寺にて自刃す 法名端立院一到浄印大居士
天正15年（1587年）	烏帽子山城跡に五箇八幡建立

（参考文献） 興亡史跡笠岡城物語、歴史読本昭和54年6月号、福山志料

（福山市大門町津之下653）

ただおき
神辺城主山名理興の出自

田口義之

私達の住んでいる備後地方は著名な戦国武将の少ないところである。山陰の尼子、防長の大内という兩大勢力のはざまにあったという政治的な条件、或は平野が少なく、山間の小盆地によって構成され統一勢力が出現しにくい、という地理的条件に影響された為かも知れない。

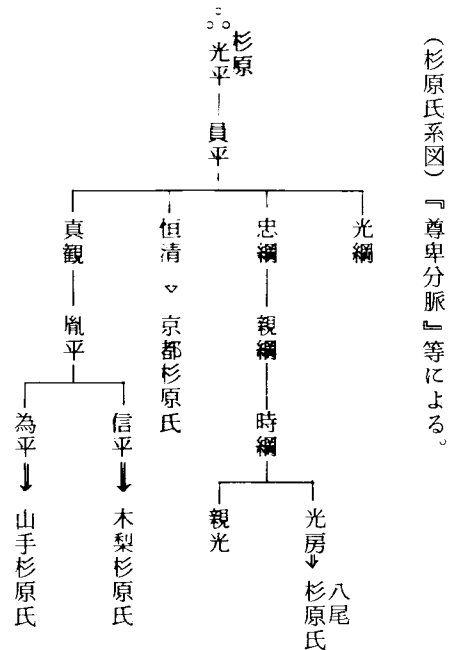
そんな中で一人異彩を放っているのが山名理興である。彼は備後の名族杉原氏の出身といわれ、天文七年(1538)七月、大内義隆の援助によって神辺城主となる。当時、備後の中心はのち水野勝成によって福山城が築かれる迄は室町幕府の守護山名氏の拠点である神辺城にあった。すなわち、大内義隆の理興に寄せる期待と信頼が知れるのである。

しかし、彼の野心は神辺一城ぐらいでは満足しなかったらしい。それは彼が神辺に入城すると杉原姓を捨て、「山名」理興を名乗っているのを見ればわかる。山名は備後の守護家である。それを冒すというのは彼が旧守護家の伝統を嗣ぎ、備後一国を支配しようとした抱負の現われである。こうして理興は大内氏の勢力を背景に着々と勢力を拡大し、天文十年(1541)頃には備後半国をその支配下に収めるに至った。けれどもこれだけでは第一級の戦国武将とは言えない。彼もその立場は良くわかっていた、大内氏の勢力下にいる限りはだめなのである。そこで彼は当然尼子の力を利用することを考えた。うまいことに天文十二年(1543)、出雲に侵入し、尼子の本拠富田月山城を攻撃した大内義隆は味方の裏切りによって大敗北を喫し、命からがら山口に逃げ帰ったのである。理興は尼子にかけた、そして周辺の大内方の城々を攻略し、同年の六月には安芸に侵入し、毛利元就の兵と戦っている。しかし、彼の野心もここまでで

あった。体制をたて直した大内氏は毛利元就と協力して理興討伐に立ちあがり、同年の暮には早くも神辺城に軍勢を向けたのである。以来、天文十八年(1549)九月、理興が城を捨てて出雲に逃走するまで秘術を尽した攻防戦が続く……。(『福山市史』上巻等)

以上が山名理興という戦国武将のあらましである。ところで、一般に戦国武将の素性は不明なことが多い。この理興という人物も例外ではない。その出自があやふやなのである。私は理興の略歴の最初に彼は杉原氏の出身であると述べたが、実はこの杉原氏というのが曲者なのである。杉原氏は中世備後で大きな勢力を持った豪族であるが単一の家ではなく、系図のように多くの一族を輩出し、それぞれが居城を構えて独立していたのである。

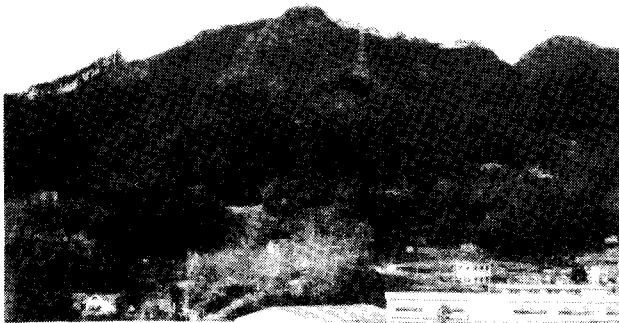
余り小さなことにこだわらない人ならば、理興は杉原氏の出と聞けば「はあそうか」とそれ以上追求しないであろうが、私などのよ



うにそういった小さな疑問に抱泥する者にとってはそれでは済まされない。当然「理興はどの杉原氏の出身だろうか」というところまで思考が進むのである。

そこで、関連する文献史料をひもといたわけであるが、私見を披露する前に備後杉原氏について少し述べて置きたい、そうすればあとの説明が楽である。

杉原氏は学者の説によると備後自生の豪族で御調郡杉原保(広島県尾道市)がその名字の地であろうという(福山市史)。又、『尊卑分脈』等の系図によると恒武平氏貞盛流で、平季衡が丹波国杉原に住したのが始まりという。伝説では季衡の孫杉原伯耆守光平が鎌倉時代



八尾杉原氏の拠った八尾山城跡(府中市出口町)

の初期備後守護職に任せられ当地に下向、府中の八尾山(府中市出口町)に居城を構え土着したという。その後、惣領家は代々八尾山城に住し室町時代に至る(「八尾杉原氏」という)が、その支族の杉原信平、為平兄弟は南北朝時代、足利尊氏に従って戦功があり、建武三年(1336)、備後国木梨庄(尾道市北郊)地頭職を獲得、信平はその地に鷲尾城を構え、その子孫は備後有数の豪族として発展して行く。これが「木梨杉原氏」で室町時代には惣領家をしのぐ勢力を持っていたという。又、為平も木梨庄半分地頭職を有し、同庄内に家城を構えて住したが、のちその子孫は山手の銀山

城(福山市山手町)に本拠を移した、これが「山手杉原氏」である。

理興の出身は杉原氏、というのが本当であれば、以上三つの杉原氏の内いづれかにそれが求められるはずである。事実、いろんな文献を読んでいくと、理興の出自に関してはそれら杉原氏の中の二つ、すなわち「八尾杉原氏出身説」と「山手杉原氏出身説」の二説が存在することがわかるのである。

「八尾杉原氏出身説」は『福山志料』、『西備名区』、『備陽六郡志』といった江戸時代の郷土地誌に述べられているもので、代表として『備陽六郡志』の記事をあげれば、その「後得録」芦田郡本山村のところに

「八尾の城、山名宮内少輔理興の古城なり。」

とあり、理興は始め八尾山城に居城していたこと、すなわち理興は八尾杉原氏の出身であるというのである。更に『芦品郡誌』を見ると、そのP 319。出口町古城址八尾城として「(略)其子を忠興(理興)といふ、大永四年尼子氏に属し、毛利氏と共に大内軍を佐東金山にて敗る、後大内氏に属し、天文七年大内義隆の命に依り、山名氏政を神辺城に討ち、其賞として神辺城を賜ふて、

之に入る」として次の系図をあげている。

(杉原) 基康——時興——忠興

石見守 宮内少輔 初理興
伊豆守 宮内少輔

すなわち、これによれば理興は八尾山城主杉原時興の子であるというのである。

「山手杉原氏出身説」は山手杉原氏の子孫に伝えられたもの。同氏は後に毛利家臣となり長州萩に移り住んでいるが、毛利氏の根本史料集である『閩閩録』に収録された杉原与三右衛門家々譜に

「 (略)
 杉原播摩守匡信
 備後国沼隈郡山手之城主
 杉原豊後守理興
 備後国山手之城主 」

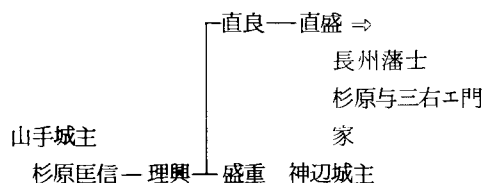
とあって匡信の子が理興であるというのである。この場合、理興の事跡の中に神辺城主としての記述はないが、それは理興が現主君の毛利氏に敵対したことをはばかってのことであろう。この書物は現在史家の間で評価の高いものであるから、その系譜類も信頼性が高いといえよう。

以上二つの説をくらべてみるときわだった違いがあるのに気づく。それは地元の伝承と一応は名の通った史料に基く説の違いである。こういう時、学者はどう判断するであろうか、もちろん名の通った史料の方を取るのである。この場合もそうである。大学の先生方の書かれた『福山市史』上巻を見ると、「杉原理興の出自については異説もあるが、福山志料は八尾杉原氏の出と推定、大体山手杉原氏の出と見るべきであろう関関録六八」一四三というのである。『福山市史』は現在この地方で一番レベルの高い史書であるから、これは通説といって良いであろう。しかし、どうも私はこの説に反発を感じるのである。信頼性が高い書物に書かれていることは皆真実なのであるか。地元の伝承などというのは所詮取るに足らぬもので、史料としては認められぬものなのであるか。

私は「伝承」というものも一概に捨て去るべきではないと思うのである。つまり、この場合理興は八尾杉原氏の出身であるとする説に魅力を感じるのである。地元の伝承を尊重したいという在野研究者の意地だけではない、『関関録』の山手杉原家譜には何かカラクリがあるように思われてならないのである。

理興は出雲に逃れたのち、弘治元年(1555)毛利元就に詫びを入れて許され、神辺城に帰っているが弘治三年(1557)春、中風で病死してしまう。彼には子がなかったのもその跡目は吉川元春の強い推挙で理興の四番家老、山

手銀山城主の杉原盛重が相続する(『陰徳太平記』等)。そして、毛利家中杉原与三右衛門家はこの盛重の兄直良の子孫なのである。杉原与三右衛門家譜によると次のようになる。



そうすると不思議なことに気づく、理興と盛重の関係は養父子とすれば筋が通る。しかし、気を付けなければならないのは盛重は元理興の四番家老であって吉川元春の推挙で神辺城主となったという事実である。神辺城は毛利氏にとっても重要な城である。明城にしておくわけにはいかない。そこで毛利氏は杉原盛重を部将として入城させたのである。養子でも何でも無い、それは結果なのである。つまり、この系譜には作為が加えられている可能性が大きいのである。

元々理興は八尾杉原氏の出であったが、盛重がその跡を継いだことによって山手杉原氏の系譜の中に取り入れられた、こう考えた方が良いのではなかろうか。そうすれば地元の伝承も生かされると思うのである。

(福山市多治米町916)

備後神辺城主杉原盛重

森 本 繁

神辺城と山名理興

杉原盛重は山陽道備後神辺の城主であるが、その名はむしろ山陰の武将として有名である。これは、杉原盛重が毛利氏の支配下にあつて、そのほとんどの生涯を山陰経略に捧げたからである。毛利氏の出雲経略が熾烈化した、永禄7年から天正9年にかけて、杉原盛重は伯耆尾高の泉山城主であつた。したがつて、その最期も天正9年12月25日、雪まじりの寒風が激しく日本海から吹きつける伯耆の八橋（やせば）城内においてであつた。羽柴秀吉による本格的な因幡攻撃が始まつて凡そ半年後のことであり、吉川経家の鳥取城は、ちょうどその2ヶ月前に落城している。

杉原盛重の享年も、正確な生年月日もわからない。天正9年（1581）に病死したときは、60歳に達していたであろうから、恐らく大永元年（1521）頃の生まれであろう。そのかれが備後神辺城の城主となつたのは弘治3年（1557）、神辺城の先代山名理興が病没してからだ。したがつて、盛重が大永元年の生まれであるとするならば、このとき既に36歳になっていたことになる。

『西備古城記』（元禄8年調）によると、神辺城の初めは建武2年11月16日で、備後国の守護としてやつて来た浅山備前守（朝山次郎左衛門尉景連）が、紅（黄）葉山に築城してからだ。その後、備後国守護としてこの地を支配したのは、細川、渋川、今川、山名の諸氏であり、特に山名氏は応永8年（1401）から天文7年（1538）まで137年間も備後の守護をつとめている。

だが、神辺城主として杉原盛重の先代山名理興は、この山名氏ではない。永正年間（1504—21）から天文年間（1504—56）にかけてこの地に勢力を伸ばして来た周防の大内

氏と出雲の尼子氏との勢力の狭間で、尼子氏の支配下に入った山名氏の神辺城を、大内氏へ奪い取るために活躍した杉原一族である。

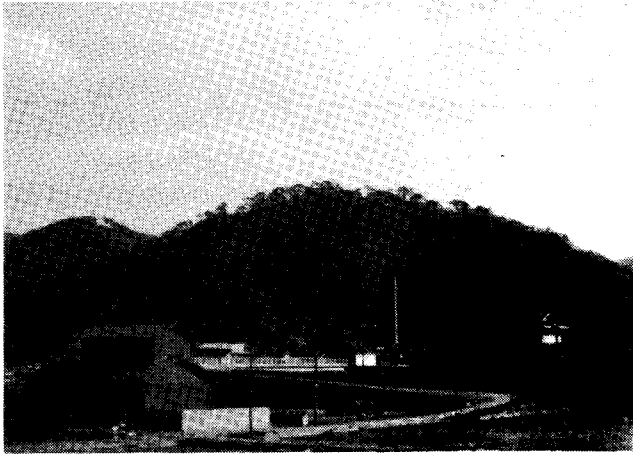
杉原氏は備後生え抜きの国人衆といわれるが、毛利氏や小早川氏と同じように、鎌倉時代の初期に関東から下つて来た西遷地頭の一族であつたようだ。室町期から戦国時代にかけて府中の八ツ尾山に本拠を置き、その勢力は備南各地に及んだ。杉原理興はその一族の子孫で、八ツ尾山城の出自である。①

当時神辺城は、尼子方の山名忠勝が山名氏惣領家の祐豊が派遣していた守護代太田垣氏を攻めて、これを占拠していたため、周防の大内義隆が杉原理興に命じてこれを攻略させた。城が落ちたのは天文7年（1538）である。新しく神辺城主となつた杉原理興は、このときから山名の姓を僭称することになる。

さて、この山名理興が、大内氏の支配下から尼子氏へ鞍替えしたのは天文12年からである。それまで山名理興は、天文9年9月に大内配下の毛利氏が尼子氏によって吉田郡山城を包囲されて苦境におちいたとき、陣中見舞の使者を郡山城に派遣しているし、天文11年に大内義隆が出雲遠征に出陣したときも、その配下にあつて富田城攻略の一翼をになっている。

ところが、天文12年になって大内軍が富田城攻略に失敗して敗走を始めると、たちまち理興はこの大内氏を見限つて尼子氏に寝返つた。この時期、備後の山内氏や宮氏も安芸の吉川氏も大内氏を見限っているのだから、杉原氏がこの時流に乗つたとしても責めるのは酷である。

しかし、そのため山名理興は、それ以後、執拗な大内氏の攻撃に6年間も苦しむことになる。宿敵尼子氏との対抗上、大内氏が山陽



備後神辺城跡

道のこの重要拠点を無視する筈がないのである。大内軍の神辺城攻撃は、早くも天文12年の6月から始まった。

勿論、尼子晴久も、この神辺城を救援するために翌年になって軍勢を南下させたが、備後における大内方国人衆三吉氏や上山氏が、安芸の毛利氏と共にこれを阻んでいる。

神辺合戦と杉原盛重

杉原盛重の名が初めて戦記にあらわれるのは天文16年から翌17年にかけてである。

神辺城を狭んで備後北部と瀬戸内沿岸部を押えた大内氏は、この頃になって本格的な総攻撃を開始したが、その攻撃に対抗して神辺城に立籠ったのは杉原盛重・藤井皓玄・木梨興勝・所原肥後守・大江田隼人介ら総勢一千余騎であった(西備名区)。また、義隆は天文17年6月、陶隆房に防長の手勢五千を与えて備後制圧に乗り出し、隆房は毛利元就をはじめ吉川元春・小早川隆景・宍戸元源・平賀隆宗・香川光景らの安芸国人衆を率いて、総勢一万六千余騎で神辺城下に押し寄せたが、このとき神辺城兵の先頭に立ってめざましい活躍をしたのが四番家老の杉原盛重であった(備後太平記)。

ちなみに、このとき吉川元春は19歳の若武者であったが、神辺方の杉原盛重と同様に

めざましい働きをして敵味方を驚かしている。英雄は英雄を知るといえるが、後年吉川元春が山名理興の亡きあと、その後任として盛重を推挙したのは、このときの盛重の活躍を自分の網膜に焼きつけたからであった。

その後、神辺城は一進一退を続け、膠着状態におちいったので、陶隆房は味方を集めて軍議を重ねた結果、平賀太郎左衛門隆宗に後事を託して備後から撤退することにした。

すなわち『備後太平記』は、

「評論様に有りし所に、傍より平賀太郎左衛門隆宗、陶隆房に向ひて申しけるは、予、忠興(理興)とは数年遺恨有り。其子細は芸州の知行の外に、大内より備後の内、春部の庄を加増に賜はる。吾れ彼の春部の庄に城を築き居城とす。其時、我に無駄の行迹忘れがたく、渠が所領尽く予に賜はりなば、一身の智略を以て此の城を責め落し、忠興が首を討ち取って御上覧に備へ申さん、哀れ望みに任せ下さるべしと願ひければ、陶隆房を始め満座一同に望む所なれば、頓て領掌の望みに任せ給へば、平賀大いに悦び、直に向ひ城を願ひければ、隆房則ち総陣へ人夫を出さるべしと触れ廻し、頓て城を形の如く築きければ、其時に渡辺源六を添へられ、都合其勢八百余騎を師いて五ヶ手島に楯籠る」

しかし、この隆宗の意気込みにもかかわらず、かれの生存中、神辺城は落ちなかった。神辺城が落ちて城主の理興らが出雲富田へ逃亡したのは天文18年9月4日であるが、隆宗は2ヶ月前の7月3日に病死しているからである。神辺城は、隆宗を亡くした兵士たちが、主君の弔い合戦によって落とされた。落城後、杉原盛重も、一族と共に出雲へ逃れたと思える。

毛利氏と杉原氏

神辺城が落城したあと、間もなく安芸備後の政治地図は大きく塗り変えられた。天文20年の8月に叛旗をひるがえした陶隆房（晴賢）が、9月1日に主君大内義隆を自刃させて、それまで大内配下にあった毛利氏が、自立への道を歩み始めたからである。

天文23年5月、毛利氏はついに陶晴賢と断交して、9月15日に折敷畑で陶軍を潰走させた。それまで尼子氏の支配下にあった山名理興が、尼子氏から毛利氏に乗り換えるのは、この合戦の後と思われる。尼子氏では当主の晴久が元就の謀略にかかって新宮党を滅ぼし、その軍事力を半減させたから、機を見るに敏な理興は、尼子氏の斜陽を決定的なものと考えたわけだ。

理興はひそかに盛重を使者として元就のところへ送り、毛利氏への帰属を願い出た。もとより、これから大事な陶氏との決戦をひかえた元就に、この申し出は渡りに舟というところである。元就は理興の申し出を許して、再びかれを神辺城主とした。恐らく、その時期は年が明けた天文24年（1555）の春頃のことであろう。弘治元年（1555）9月1日の厳島合戦に、理興配下の人物と思える杉原若

狭守が、毛利方として出陣しているからである。

神辺城主に帰り咲いた理興は、それを機に山名氏から本姓の杉原氏にもどり、毛利氏の備中進攻の第一線に立とうとしたが、病いのため、弘治3年（1557）3月5日に死亡した。理興には嗣子がなかったので、このあと家督相続の問題が毛利氏との間で協議された。

元就は備後の国人衆を自分の味方につけておくために、神辺城主の後嗣を杉原一族の中から選んだ。諸将に意見を求めると、先ず小早川隆景が、杉原家の筆頭家老であった杉原興勝を推挙した。興勝は人格も円満であり、武勇にも勝れている。ついで吉川元春が、その武勇抜群を理由に四番家老の杉原盛重を推した。先年来の盛重の武功を目の当たりにした元春にとって、この男こそ今後の対尼子戦において、かけがえのない戦力となると考えたからだ。

だが、温厚な隆景の眼に、この男は粗暴で危険この上ない人物としか映らなかった。「盛重は乱暴者で、人を生きたる虫ほどにも思わず、その上、常に博奕をたしなみ、自己の強剛を誇って、危い合戦にも強引に仕かけるような人物である」というのが、隆景の盛

重に対する人物評である（陰徳太平記）。

小早川隆景にとって、この盛重が危険この上ない人物と思えたのは、かれが特異な家臣団を抱え込んでいることにも原因があったようだ。盛重はその下級家臣団に、忍者や山賊・海賊あがりの者共を多数採用し、合戦の場合には巧妙な戦術を展開して、人の意表をついている。



山手銀山城址
理興の4番家老時代盛重が居城した

『陰徳太平記』の記述をかりれば、杉原盛重の軍団は「元來盜賊を業として世を渡りける奴原なりければ、敵城敵陣に夜討忍討をかけ、或は火を付け、又は十重二十重に取り巻きたる所を易々と忍びて通路しける故、盛重敵の隙を闖（うかが）ひ、重城を陥れ、堅城を挫（とりひし）ぐ事、員（かず）を知らず」というわけである。

しかし、世の中が平和な時代ならいざ知らず、物騒な戦国時代においては、むしろこのような用兵の妙は、毛利軍にとって願ってもない軍事力の強化となる。元就は元春の主張を容れて、この男を神辺城の城主とした。

伯州の神辺殿

神辺城主となった杉原盛重が、推薦者吉川元春の期待を裏切らず、その勇名を遺憾なく発揮した戦闘は、永禄元年（1558）の2月から3月にかけての出羽（いずは）合戦である。

永禄元年2月上旬、吉川元春は父元就の命を受けて、いよいよ石見遠征に乗り出したが、そのとき2月27日から始まった石見出羽の合戦で、劣勢にあった毛利軍を優勢に好転させたのが、この盛重であった。

盛重はこのとき1ヶ月前に神辺城主になったばかりであったが、吉川元春の石見遠征を聞くと、手勢八百を率いて、夜を日について出羽表に駆けつけた。戦場に着いてみると、劣勢にあった吉川軍は本庄常光や小笠原長雄の軍勢に追い立てられて、氣息奄奄の体である。その吉川軍が三ツ巴の旗をなびかせて本庄軍の横手から攻め込む杉原盛重の軍勢を見て、俄然息を吹

きかえしたというから、いかに盛重の用兵が妙であったかがわかる。

盛重が戦略家として、たしかな眼力を持っていたことは、やはりこのときの戦場で発揮された。かれは小笠原長雄の配下にあつて出羽の北西にある日和城を守っていた寺本玄蕃を吉川元春に進言して毛利方に服属させている。かれが、この寺本という人物の性格を見抜いたからである。

杉原盛重が、伯州の神辺殿として伯耆尾高の泉山城主となったのは、永禄7年（1564）の末である。その前年の白鹿城攻めで、かれが抜群の戦功をあげていたので、その戦功に対する報奨の意味もあつてのことであろう。

尾高泉山城は、現在の大山有料道路の入り口付近にあつた居城だが、そこに当時、山陰道の東西を結ぶ出雲街道が通っており、また伯耆南部と備後をつなぐ物資の輸送路も通じていた。したがって、この尾高は交通上の要地であり、ここに軍事上の拠点である泉山城を設けることは理の当然であった。

尾高泉山城は、それまで行松左衛門尉正盛の居城であつたが、正盛が永禄7年の12月に中風にかかつて急死したので、杉原盛重が代つてこの城主となったわけだ。病死した正



尾高泉山城跡

盛には、美貌の妻との間に徳若、松千代という二人の男子があった。しかし、未だ幼少である。終局に近づいた毛利氏の対尼子戦で、戦略上の重要拠点であるこの尾高を、行松氏の家臣団に委せておくことは、極めて危険なことであった。そこで、吉川元春が父元就に進言して城主にしたのが、この盛重であったというわけである。「杉原盛重を行松の後家と結婚させ、子息の成長するまで尾高城に在城させれば、伯耆一国の静謐はもとより、因幡・但馬のあたりまで盛重の武威に服することになる」（陰徳太平記）というのが、元春の主張であった。元春がいかに盛重を高く評価していたかがわかる。

かくして、盛重は伯耆尾高で泉山城と美貌の熟女を手に入れたわけだが、この行松の後家はかれの正妻ではない。盛重は既に永禄元年正月、神辺城主となったとき、先代山名理興の妻を自分の正妻（後妻）として元就から頂戴している。

理興の妻は元就の姪（めい）であった。すなわち元就の兄興元の娘で、大永3年（1523）に9歳で天逝した幸松丸の姉である。②この女性は毛利氏の政略結婚の犠牲にされた薄幸の女性で、初め備後甲山城の山内豊道に嫁し、豊道の死後、今度は竹原の小早川興景に再嫁した。ところが、この興景も天文13年（1544）に安芸佐東で陣没したので、毛利家に帰され、弘治元年（1555）になって山名理興が毛利氏に帰順したとき、元就はこの女性を三たび神辺城へ嫁がせている。仮にこの女性を弟の幸松丸と一つの年上の姉としても大永3年当時10歳として、弘治元年には既に42歳である。そして、弘治3年3月5日に彼女が3番目の夫を亡ったときには44歳であるから、この女性が4番目の夫である盛重に嫁いだときには45歳であったという勘定になる。前にも述べたように、このとき盛重も既に30数歳には達していたであろう。

その盛重が、6年を経て、2人の子持ちとはいえ、世にかくれなき美貌の熟女を手に入

れたのである。今になっては、かれの複雑な心裏をうかがうすべもないが、少なくとも、かれがこれを不満に思っていなかったことだけは事実のようだ。その後のかれの毛利氏に対する献身的な働きぶりを見れば、どうしてもそのように思えてくる。

尾高泉山城に居を移したあとの備後神辺城には、盛重の子息弥八郎元盛と又次郎景盛とが留守居として置かれ、城代には所原肥後守が任命された。また泉山城内における行松派と杉原派の家臣団の対立は、家臣に安逸を許さない盛重の戦鬪的指導力によって、巧みに統御された。

鹿介と盛重

杉原播磨守盛重と山中鹿介幸盛との宿命的な対決は、盛重が尾高泉山城主となって間もなく、永禄8年の春から始まった。富田月山城への物資補給路争奪をめぐる弓ヶ浜合戦である。

当時、毛利軍に包囲された富田城内への物資補給ルートは、弓ヶ浜半島から中海を経て飯梨川をさかのぼる海上ルートと、伯耆の日野川をさかのぼって江府の江尾へ陸上げし、そこから山狭の道を運ぶ陸上ルートと、二つしかなかった。毛利氏が杉原盛重を尾高の城主に任命したのは、この二つの物資補給路を分断させるためである。

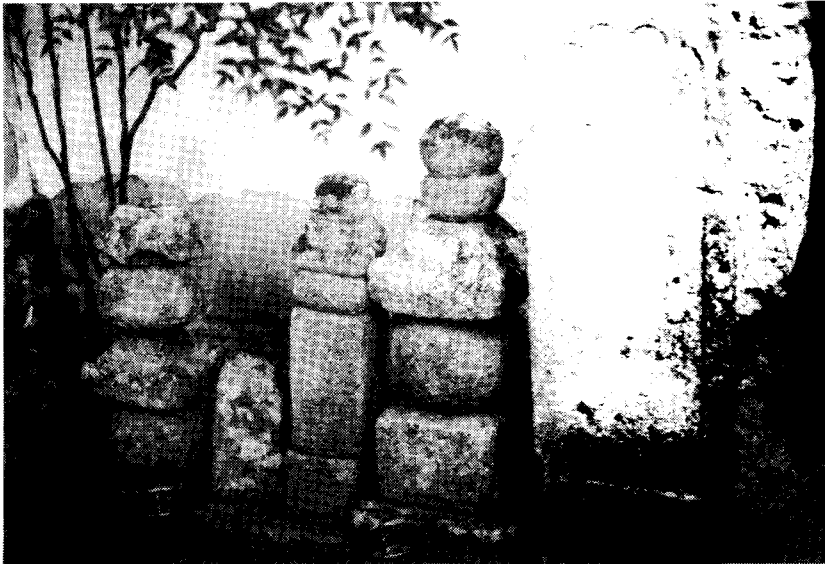
そこで、富田城の尼子方は、この切断された補給路を回復するため、山中鹿介幸盛以下立原源太兵衛・森脇市正・本田豊前守などの武将を派遣して、美保関から弓ヶ浜を経て尾高に及ぶ地域の奪還を図った。先ず美保関を奪取した尼子軍は、そこを根拠地として弓ヶ浜に兵を進め、さらに尾高城を攻撃しようとしたのである。

このとき、盛重は城兵千五百を率いて弓ヶ浜半島へ出陣し、巧みに敵を尾高城下へ誘い込んだあげく、寡兵をもって味方に倍する敵軍を撃破している。このときからあと、山中鹿介が杉原盛重と対決するいずれの戦鬪にお

いてもそうであるが、いかなる鹿介の戦術をもってしても、この盛重にだけは歯が立たなかったのである。

そういう意味でわたしは、悲劇の英雄山中鹿介幸盛を云々する場合には、先ずその好敵手としてかれの前に立ちほだかり、戦闘においてことごとくかれの野望をくじいた杉原盛重の軌跡を、この幸盛との関連で今一步追求してしかるべきだと思うのである。通常、鹿介幸盛に配する毛利方の武将としては吉川元春があげられるけれども、元春は将に将たる人物であって、幸盛は所詮兵に将たる忠勇な武将にしか過ぎない。その意味では元春配下の杉原盛重こそ、この幸盛に配する人物として最もふさわしいとわたしは思うのだが、どうであろうか。このあと盛重は、元春の命を受けて、尼子家再興を夢みて執拗な反撃を試みる鹿介を随分と苦しめている。鹿介と盛重とが互いに敵意を燃やしたことは、『陰徳太平記』の「盛重鹿之助は敵ながらも昔より勝れて半(なか)悪しう候」という記述によってもうかがえる。

永禄8年8月、盛重は元春に命ぜられて日野川の上流をさかのぼって江美城を攻め、城



山手三宝寺銀山城主杉原一族の墓

主蜂塚右衛門尉を自刃に追いやって、尼子氏の陸上補給路を断った。そのため、富田山城は翌永禄9年(1566)11月に落城した。

出雲で尼子氏が滅亡すると、毛利氏は北九州に兵を送って大友氏と対峙した。永禄11年6月、盛重は吉川元春の命を受けて山陰から九州へ渡ったが、その留守中、備後の神辺城と伯耆の尾高城とで思いがけぬ事件が起こった。両城とも毛利氏に叛旗をひるがえした尼子方の国人衆によって奪われてしまったのである。

すなわち、永禄12年(1569)6月に島根半島の千酌に上陸した山中鹿介ら尼子氏の残党が、尼子勝久を擁して出雲奪回に乗り出した。すると、備後の藤井皓玄が大江山隼人介らと力を合わせ、8月3日に兵五百を率いて神辺城を強襲し、城を奪い取った。城代所原肥後守は盛重の妻女や次男の景盛を擁して、辛うじて城外に逃れた。伯耆の尾高城もこのとき、美作から侵入した国人衆によって城を乗っ取られた(雲陽軍実記)(陰徳太平記)ようだ。

しかし、この4日後に神辺城の方は毛利元就の命を受けた檜崎豊景・村上亮康・三吉高

亮らの力で回復され、乗取りの張本人であった藤井皓玄は自刃に追いやられた。尾高城の方は城を守り抜いたという異説(老翁物語)もあって、はっきりしないが、いずれにせよ間もなく旧に復したようだ。

元亀元年(1570)1日、毛利氏は輝元を総大将とする1

方3千の援軍を送って、布部山で6千8百の
尼子軍と戦い、危局にあった富田月山城を確
保した。そのあとは、坂道を転がるように尼
子党は敗走を続けるのだが、この年10月、
盛重は末次城に攻め寄せて鹿介の軍勢を撃破
している。そして、元亀2年になると、吉川
元春は伯耆の末石城に鹿介を攻め、降伏して
来た鹿介を盛重の居城尾高に幽閉している。

このとき、自分の股に刀を刺して血を流し、
赤痢を装った鹿介が一晩中、百回近くも廁に
通って、番兵の油断を見澄まし、城外に脱走
したという有名な話がある。これは盛重が城
中から密かに新山城の尼子勝久へ送った鹿介
の密書を手に入れて、その叛意が歴然として
いるのを知り、元春に誅殺を進言しようとし
た矢先のことといわれる。

かくして、鹿介と盛重の宿命的な対決が終
わるのは、天正6年(1578)7月4日、播磨
の上月城で、力尽きた山中鹿介が主君尼子勝
久と共に毛利軍に降伏を申し出たときである。

この上月城合戦で、鹿介は城兵を盛重の陣
地に忍び込ませ、城兵を苦しめていた盛重方
陣地の台無鉄砲(大砲)を谷底へ突き落とす
という離れ業を演じて、盛重の面目を失わせ
ている。

「かかる忽諸(こつしょ)して、台無を盗
まる事、盛重生涯の面目を失ひ、身後の恥
辱也。此鉄砲取返すを得ずば、吾当城を枕と
して討死せん」

『陰徳太平記』にあらわれた、盛重の心境
である。

杉原一族の終焉

杉原盛重が伯耆の八橋城内で病死するのは
天正9年(1581)12月25日、山中鹿介幸
盛との宿命的な対決が終わって4年目のこと
である。

八橋城は杉原氏の抱え城の一つであるが、
もとは尾高城と同じく行松左衛門尉正盛の居
城。大永4年(1524)に尼子氏に奪われ、そ
の配下の吉田氏の居城となったが、永禄8年

(1565)になって毛利方の三村家親がこれを
落とした。杉原氏が毛利氏からこの居城を与
えられたのは、そのあとである。

盛重が尾高城を嫡子の元盛に譲って、この
八橋城に移ったのは天正6年(1578)の頃で、
この年、伯耆羽衣石城の南條元統が毛利氏に
背いて山陰経略を進める織田方についたから
である。

今、八橋城跡は国鉄山陰本線に分断されて、
当時の面影はない。八橋駅で下車すると、す
ぐ目の前の鉄道線路を挟んだ2つの丘が、そ
の城跡である。

盛重には前妻との間に、前に述べた嫡子弥
八郎元盛・二男又次郎景盛のほか、三男に少
輔五郎重信(景保)があり、外に2人の女子
があったようである。③

盛重が病死すると、遺骨は八橋の泰玄寺と
尾高の観音寺と手間の大安寺に分骨分祀され
た。尾高の観音寺と手間の大安寺には、それ
ぞれ杉原播磨守盛重の供養塔がある。

盛重の死後、尾高の泉山には嫡男の元盛が
居住し、八橋の大江城には二男の景盛が住ん
だ。ところが、二男の景盛は兄の元盛が羽柴
秀吉と通じていることを理由に、天正10年
10月26日、元盛とその二子を殺害した。
景盛はこれによって尾高を手に入れ、尾高の



杉原盛重の供養塔
(尾高の観音寺墓地)

佐陀に砦を構えたが、今度は吉川元長が、この景盛が羽柴方の南條氏と通じていることを理由に佐陀城を包囲し、かれを自刃に追いやった。天正12年8月のことである。

羽柴方の南條氏は、このとき伯耆の八橋城をも領有していたが、これは天正10年の6月に織田信長が本能寺で光秀に討たれたあと、秀吉と毛利輝元との間に和議が成立し、「山陰は伯耆八橋の川を境とする」という取り決めがなされたからである。八橋城はこのときから羽衣石城主南條元統の持城となったわけだ。したがって、それまで八橋城主であった杉原景盛が城を追われることになり、尾高城を手に入れたばかりに、兄の元盛を謀殺したのだと推理できる。

杉原氏を取り潰されたあと、吉川元春は尾高泉山城に二男の広家を入城させ、伯耆半国と出雲の能義郡を与えて十二万石の領主とした。一方、備後の神辺城は毛利輝元がこれを没収して、毛利氏の直轄領とした。しかし、毛利氏は杉原氏に名跡の存続だけは許して、盛重の三男重信に千四百貫（三千石とも）の所領を与えた。これが、吉川広家の家臣で、少輔五郎景保と名乗る人物である。

(註) ①

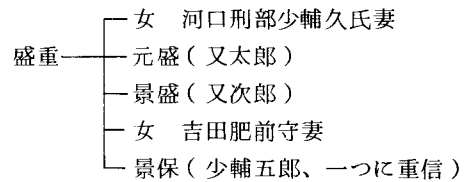
『福山市史・上巻』や『広島県史・中世』によると、杉原理興を民部丞為平の子孫とし、山手銀山城主を「匡信一理興一盛重」としているが、これは『閩閩録』杉原与三右衛門の項にある系譜書や山手三宝寺の過去帳に「当村古城主、元祖杉原匡信、二代杉原理興、三代杉原盛重」とあることを根拠としているようである。しかし、杉原匡信の没年は弘治2年6月16日であり、そのあと杉原盛重とのあいだに、この理興が城主として介在したとはとても思えない。『西備名区』『福山志料』の記述および『神辺町史・上巻』所載の杉原氏系図等により、杉原理興は府中八尾山城の出自とするのが妥当と思える。

(註) ②

毛利興元の娘が杉原盛重の妻となったことは『毛利弘元子女系譜書』（毛利家文書191）に、「興元 御かみさま高橋様之御五もし」とあり、続けて、「御五もし、初は山内（豊通）へ御座候、其後竹原殿（小早川興景）へ御座候、其後杉原殿へ御座候、其後同盛重へ御座候。御次男幸松殿」と記載されていることによって、ほぼ明確である。なお河合正治氏は、この女性が小早川興景のあと行松氏に嫁し、そのあと杉原盛重に嫁したとしているがその根拠は不明である。

(註) ③

『神辺町史・前巻』所載「杉原氏略譜」によると、杉原盛重は山手銀山城の出自となっており、盛重の子女はつぎのごとくである。



【参考文献】

- 『毛利家文書』『萩藩閩閩録』『福山志料』『老翁物語』『陰徳太平記』『備後太平記』『雲陽軍実記』『安西軍策』『備陽六郡志』『西備名区』『西備古城記』（この書は元禄8年に、備後国甲奴郡上下村の丹下高藤与左衛門尉が調べたもので、内容は備後古城記と類似している）
- 『神辺町史前巻』『福山市史上巻』『神辺城をめぐる武将』（神辺の歴史と文化第十号）及川儀右衛門『毛利元就』
- 藤岡大拙『杉原盛重』（続・山陰の武将に掲載）
- 遠藤忠『杉原盛重について』（米子北高論集「北斗」に掲載）
- 松本興『続尼子時代史探訪』

(シリーズ) 生活の歴史を探る

No. 1 畳 表 今 昔

瀬 戸 洋 子

日本独特の生活様式の中に畳の上に坐るといふことがある。「畳」という語は古く「古事記」に見る事が出来る。今の筵むしろや菰こものような物であろう。平安時代は一室に二畳ないし四畳ぐらい、板の間に置かれて、今日のように敷き詰められたのは、室町時代以降のようで、町家に敷かれるようになったのが十六世紀後半、農家はもっと後になるようである。

室内での身分の差を端的に現わすため、縁の色や柄に関して制限令が出されて一般化されたのであるが、戦後漸くして廃止された。

備後表が最高級であるという事は、ご存知だと思うが、十八世紀初頭に刊行された「和漢三才図絵」という百科辞典に「畳表のうちでは備後のものが最上で、備中、備前のものがその次である」と記述されてある。

昨今は、栽培農家が少なく、沼隈一円だけとなり、九州・四国の蘭草が備後に來て織られているという有様である。

戦後は現金収入になる為、沼隈、熊野をはじめとし福山周辺には沢山栽培されており、例にもれず我家も二反程、植えていた。

十二月頃、夜なべをしてこしらえた苗を昼間植えるのであるが、寒い日には薄氷が張り、畦で火を焚き暖まりながら植えた。

蘭草の事を、この地方では「ユ」と言う。だから「イ刈」とはいわず「ユ刈」と言う。梅雨が上がり、天気が固まるのを待つ、それがだいたい七月初旬になる。日差しが強いと萎えるから、夕方陽の落ちるのを待つ、夜はガス灯をつけて刈る。よく研といだ鎌で一氣に刈れば、手応えは十分、それをそぐり落として丈をそろえるのであるが、青々しいにおいがたまらない。

トタン屋根の小屋を作り、その前に0.8 m × 2 mに深さ0.7 mぐらいの穴を掘る。色付用の華泥を解して夜のうちに染めて、立て掛けて寝る。早朝から干し初めて、二、三日干す。蘭草天気予報を農協は町内放送してくれる程、雨を気にしながらの作業である。

蛍が飛ぶ季節になると、親達の仕事をしているので、トタン屋根のおだれの下にバンコという台を置いてもらい、寝むたくなるとミニ蚊張の中で寝て、作業が終る十時過ぎ頃、父の背中に負われて帰った感触を思い出す。

表織には経糸おもてぬいが必要である。経糸は百四十六本、一目に二本かける(本間間 191 cm × 95.5 cm)

かって糸も自家製であった。「あらし」という植物を植えて梅雨の頃刈り、蒸して皮をはぎ、乾燥して割り、撚と「フメ」という物が出る。

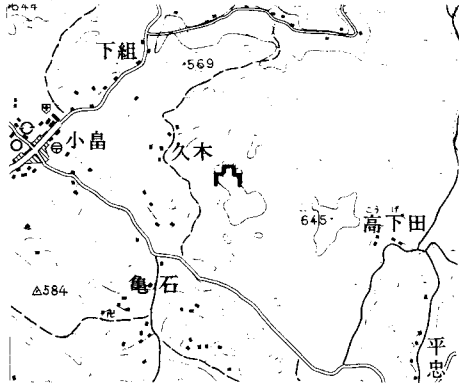
祖母がよって、母が手織で一日中織っていた後姿が目に見えて来る。一生懸命織っても一日三枚が限度であった。栽培から織り上げまでしていたのは昭和23~40年頃まで、母は今でも織っているが、機械で問屋の商品を1枚いくらかで織っている。

能登原に、自宅で栽培し、手織りをしている方おられるとの事であるが、後継者はなく、かく言う私も母の後を継ぐ気はなく、昭和の代で、畳表の匂いが薄くなるのは目に見えている。残念な事である。

No. 1 九鬼城跡（神石郡三和町小島）

神石郡は高原と神様の郡である。どんな小さな村でも目を鎮守の森へ移すと立派な「おやしろ」が森蔽とした杉木立に囲まれて立っている。

ところで、神石郡の南半を占める三和町の中心小島集落から東方を眺めると丘陵越しに頂きを平らにした山が目につく。山城マニアでなくとも「これは城跡だな」と気付く筈である。



九鬼城跡附近（1：5万 上下）

これが戦国時代、在地豪族の馬屋原氏の拠った九鬼城跡である。

「九鬼」の名はいかにも荒々しく、我々に「戦乱の城塞」といったイメージを抱かせるが、西麓の部落は「久木」と呼ばれていて、城名は地名に因むものであることがわかる。城郭の特色としては堅堀が多用されていることと、主郭背後の空堀群が見事なことが挙げ

られる。堅堀は戦国中期に流行したものと云われ、この城の築城年代を示しているようである。又、全体的に見て遺構を良く残しており、一見の価値ある山城跡である。

城主馬屋原氏は伝承によると坂東平氏の流れを汲む平正友が備中国水越馬屋原村を領して「馬屋原蔵人允」と称したことうまやらはらくらんのじょうに始まり、五代貞宗は神石郡志麻里莊（三和町小島周辺）を領し、上に有井城を築いて住したという。其後戦国期になると馬屋原正国は小島に新城を築いて本拠を移した、これが当九鬼城であるという（『神石郡誌』）。

馬屋原氏には九鬼城馬屋原氏の他に、小島の北方にそびえる固屋城くまやを本拠とした一族もあり、その家譜によると清和源氏の流れを汲む上総国の馬屋原光忠が鎌倉時代末に神石郡に下向したと伝えている。この固屋城馬屋原氏は戦国時代に安芸の毛利元就の幕下に入り、子孫は毛利氏の防長移封に従って萩に移住し、長州藩士として幕末に至っている（『萩藩閥閥録』巻四十一 馬屋原弥四郎）。



九鬼城山を望む（久木部落より）

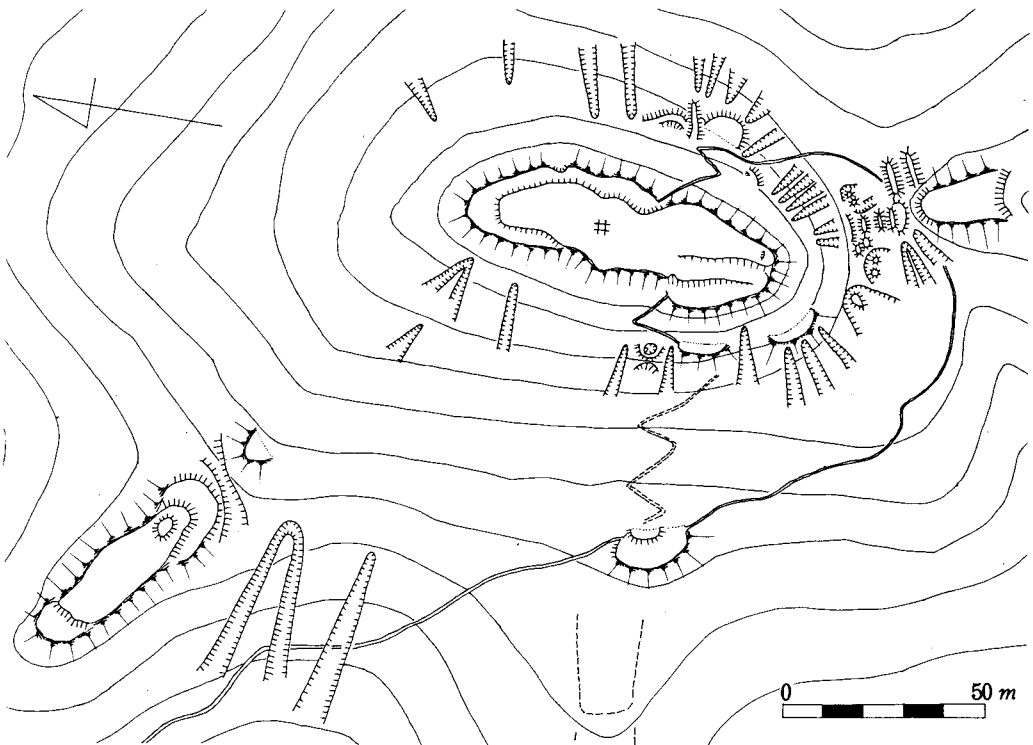
このように固屋城馬屋原氏の方は江戸期にも武士階級として存続した為史料を残しており、その動向はやゝ判明する。しかし、九鬼城の方はそうではない。この九鬼城主の子孫と称する芦品郡向永谷の人、馬屋原呂平は江戸後期に『西備名区』を著わし、自らの家系をも詳説している。それが『神石郡誌』の記述の基を成しているのであるが、一つ一つの事柄を検討していくと史料的な裏付けを欠くものが多く、鵜のみにするのは危険である。

他方、戦国期の文書を見ていくと天文から弘治(1532~57)にかけて馬屋原信春という人物の名が見える。この人物は弘治三年(1557)二月二日の備後国衆連判の起請文(毛利家文書225号)では馬屋原氏を代表して署名しており、一族中では最も有力な人物であったと思われる。跡を嗣いだ馬屋原少輔五郎(後兵部太輔)は永禄十一年(1568)二月七日、毛利氏より志麻里二五〇貫、豊松

四ヶ村(神石郡豊松村^{上、下})四四〇貫余の地を安堵されており、天正末年(1590頃)にも神石郡内で八六三石(年貢高)の知行地を持っていた。この子孫が長州藩士馬屋原山三郎家であるが、この家に伝わった文書の中に毛利氏重臣桂元澄から「くき御つほね」へ充てた書状が残っている。「くき御つほね」は馬屋原信春の妻を指しており、他の用例から推してこの「くき」は「九鬼城」を指すものに相違ない。この家には系図が残っておらず、断言ははばかれるが馬屋原山三郎家の系統が九鬼城馬屋原氏であったと思われるのである。(『萩藩閥閥録』卷四十一 馬屋原山三郎)

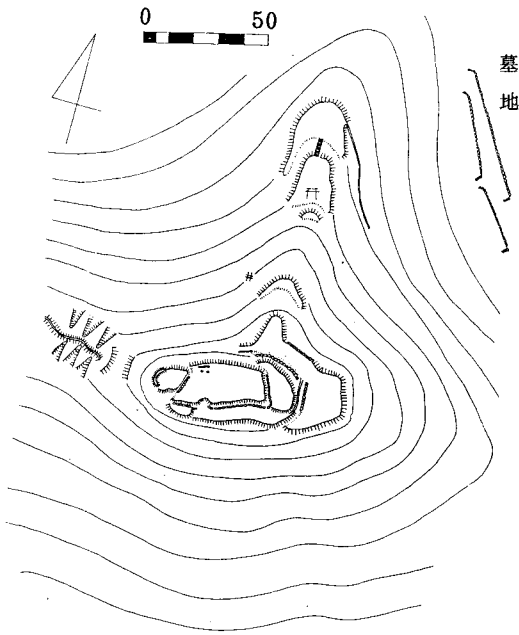
以上、城主の考証に紙面を取り過ぎたクライもあるが、地方史の中で山城跡を資料として生かす場合、その作業を略すわけにはいかない。この点、読者の諒解を得たい。

(田口 義之)



九鬼城跡

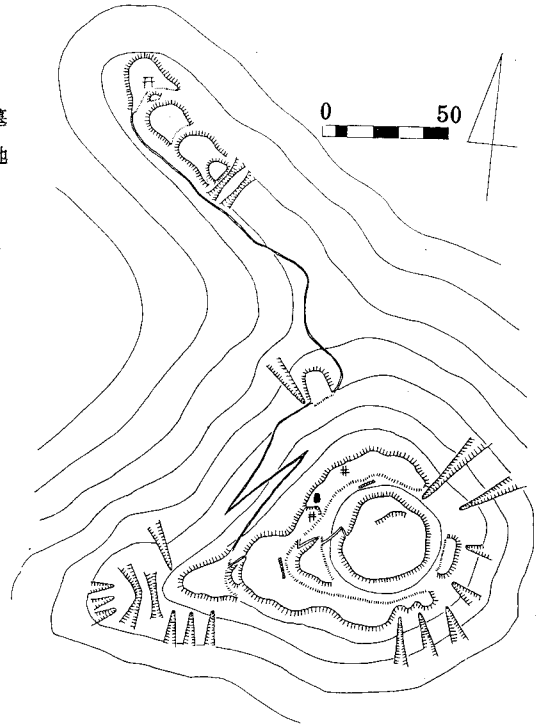
雲雀山城跡



町の中央部に市があり、そこに雲雀城がある。1443年、小早川一族である土倉対馬守夏平が築城し、この一帯をおさめている。しかし、50年後の明応2年(1493)には三吉氏の部将、池上丹波守が入り、同年 上里周防守実秀が三次から丘城である丸山城へ入城している。こうして付近一帯は三吉一統に抑えられた。雲雀城はその後、毛利氏の防長移封に伴い、廃城となった。本城の本丸は南端部分にあたり、その南に、巾3メートル、長さ12メートル、深さ20メートルの空堀が構築されている。本丸の北側には二の丸が設けられ、端には土塁が築かれている。井戸址はほぼ完全なものが残っている。

池上氏の居住地であったといわれる土井ノ内、土居屋敷等が城のふもとと東側にある。又市頭、市尻、上市、下市などの地名も残っている。更に池上氏の菩提寺として城の山麓に本照寺があり、その寺の背後には十数基の五

牛の皮城跡



輪石(池上氏の墓)がある。

町内の城の構えとして一番立派なのは、大町の牛の皮城であろう。当城は天文13年、森光新四郎景近が築城したと伝えられている。景近は天文13年(1544)尼子氏が三吉広隆を攻めた時広隆に加勢して功があったという。そして、同下総守近宗・同左衛門元清と続き文禄年間(1592~96)に廃城となっている。地名としては、耕地に城根、山林に二ノ丸・城山等の地名が残っている。隣の大字平には城主や森光氏その家臣の墓がある。又、市の址として二日市址がある。

丘城である丸山城(勝場山)は天正18年(1590)に四郎三郎元実の代に落城している。三は三つの郭からなり、数段の小郭も配置されている。一部は石垣が築かれ、周囲は急崖となっており、又、城下には御調川が西側と南側を囲んでいる。このため容易には攻略出来ないようになっている。対面には、峠



撰場城跡（千羽ヶ場）

本町で一番高い山城は大塔にある撰場場（千羽ヶ場）である。随分高く海拔348メートルである。仁野の善福寺の過去帳には、嘉吉2年(1442)大道庄官藤原三郎時実築城とあり、二代しか続いておらず短期間の城であったと思われる。

末近城、御調町の西部に位置し、大字植野にある、所の人^{すえちか}は末近を訛って「せじか」と言っている。「芸藩通志」によれば、末近四郎三郎の居所と記してある。末近四郎三郎はのち久井町へ居城し、天正十年(1582)備中高松城の織田・毛利の決戦に際し、毛利軍側の

後、城郭研究部会の力を借りて町内の山城についての全ぼうを明らかにしていきたい。

尚、田口副会長の協力を得て、雲雀、牛の皮城の図面を添付することができました。厚く御礼申し上げます。

(御調郡御調町本227-2)

三原城主小早川隆景公のいくさ目付として、三原・吉田・杭之庄より二千の兵を連れて備中高松城の支援に派遣された武将で和睦の為に同年6月4日高松城で切腹した。誠に立派な武将である。

以上町内の城の代表的なものを記したが、勉強不足の為、今

釣糸を垂るるは父らしかたへにて

岸に遊ぶ子傘回しつづ

萩の姫殿の奥まで黒光り

魚商ふ路地を巡りて

春雷はしつこき冬を振り落す

ごとく轟く楠の木の上

戦争のみじめを知らぬ我が目にも

「戦」の字すらうとましく見ゆ

不足言ふ口の動きに目をやりて

ポン柑をむき袋ごと食ふ

須磨

天明一揆の元凶として、遠藤弁蔵は今日迄、福山藩の一揆を語る場合、必ず登場してくる人物である。

彼の政治的手段、方法、施策、徴税政策が天明の一揆の最大原因であるとして種々の論説が、多くの人々によって行われてきた。事実当時の記録、文書を見る時、その徴税手段、方法たるや誠に徹底した強行策で、手段の如何を問わず、結果的には、藩が必要とする財源を確保、収奪を行っている。その具体的な歴史的事実については、私がこゝで述べるべくもなく、先賢の論説や『福山市史』等において記述されている。

『中井家文書』広田氏書留に、
天明六年十二月十六日

一、御領分中百姓騒動ニ付、朝五つ時（朝8時～10時）より御会所へ御出組被成候右ニ付在中へ手分ヶ大御目付衆、御役方、十人目付追々罷出候、御者頭（中士）中一人宛同道也 右一条日記ニ有之候と記載している。これによると一揆の発端は十二月十六日で、安那郡徳田村庄屋宅ニ集結したのは十二月二十日で、藩より者頭以下が交渉に出張しておる。廿二日、山手村え出張った役方の者が、村役人を郷分村庄屋宅え集め、百姓騒動に対する対策を協議している。この時農民側より三十ヶ条を書付をもって提出した、これに対し藩府は江戸の藩主に取次ぐことを約したため一揆勢はそれぞれの村え引取った。この時の状況について広田文書に一、百姓共不殘騒動手合有之候へ共、山手村出張より申口追々郷分村庄屋へ集、被仰渡候て、引取様ニ罷成候、昨廿日に仰渡し有之事、仍て御会御始ニ引取被成候この時説得により一部は解散している。十二月廿六日になり、備中倉敷天領の代官より領

内に騒動が起き、加勢を願ひ度いとこの要請が申出られた。

「一、四つ時より会所へ御出組の上吉右衛門殿被仰聞候」、備中倉敷代官万年七郎右衛門が手代三人を神辺に派遣して来て、福山領に接する天領が、福山領の一揆に連動して行動を起しているの、事が起った場合に、天領内の一揆弾圧に加勢に出るべく待期していた。然し福山領内の百姓は徳田村庄屋の説得により、藩に農民要求書を出し、その回答待ちということで一応静かになり、藩の出張役人共も六つ半時（午後7時）には神辺を出立、八つ半時福山に帰っている。

廿八日隅屋宗次郎の屋敷を勘定方より町方え返却している。

隅屋宗次郎といえば、栗田（何鹿）藤十郎、森脇村佐藤新四郎と共に、当時上下銀（石見銀山の差配を上下代官所が行っており、福山藩は財政窮迫に伴い、これが借入に際し、領内有力商人、豪農に命じて借入を行はしていた、その金を上下銀という）藩財政に大きく寄与している。それが為に、安永元年、二年、三年等にこれに褒美を与えて労をねぎらっている。これが行われた立案者は遠藤弁蔵、元々役当時の立案であった。然しその金の返済も思う様に行かなくなった天明五年四月十五日、隅屋宗次郎は所になり、親類の岩田屋庄右衛門え預けられ、七月十五日に至って屋敷諸道具を勘定方が押えて没収してしまった。この時弁蔵は大目付元締となっており、財政的な実権と、監査の実役を握っており、藩財政の危機を救う為、借入先である隅屋宗次郎を潰して借金の棒引を図っている。その為には弁蔵の大目付役という職は、それを行うことの出来る役職で何とかの表向の難くせを付けて取潰をはかった。この事件と同様に、

佐藤新四郎なども悪人として 所になり、財産を没収されている。

天明六年八月二十七日老中田沼意次は罷免されている。これによって福山藩は、遠藤弁蔵を介して老中田沼意次の用人三浦庄二に藩主正倫老中就任の運動を行っていたのを中止した。これ迄庄二弟山本弁助を福山藩において召抱えていたのを苗字帯刀取上げ他参を命じている。田沼の失脚と同時に邪魔になる存在となったものである。

天明七年正月七日、藩主正倫は先の十二月二十日提出の一揆農民側の要求に対し、一揆は先に 所を命じた隅屋宗次郎、佐藤新四郎、山本弁助等が遠藤弁蔵の仕打を恨んで、農民を扇動したもので、今苛酷な用金などを申付けておらないのに、この様な騒動が起きたことについては彼等扇動者の私欲より発したものであるとの書状を国元大目付え送付して来ている。当時遠藤弁蔵は江戸にあり、此様な書状が藩主より発せられるについては遠藤弁蔵の一揆発生に対する答弁が大きく藩主をしてこの様な考え方にせしめたものである。

一月十六日、「村々小面之者江申渡之覚」（福山市史）として農民の要求を全明的に拒否し、一月二十六日を限りとして安い冬値段にて年貢の納入を命じている。一月十九日、郡中之夫喰として大麦をあたえるから、一ヶ村より村役人は人足五、六人を召連受取に出ることを命じている。正月二十六日は年貢納入の期日であり、領内はまた騒然となり出し、翌二十七日四つ時（午前十時）頃より藩役人が出組して、十人目付も領内廻村をなしている。

此度の一揆再発は、昨年末の一揆発生よりは広範囲にて、領内全域におよび、各村々の庄屋宅は大半が焼打を行われるにいたった。二月朔日になっても鎮まらず、御目見以下の下級藩士は各方面に出組し、食事も組の者自身で作ったり、焚出しを喰べたりしており、亦福山領より外領に出る、出口には一揆の者が出ることを防ぐ目的で小役人等を配置して

いたが、これ等にも焚出し食が与えられた。此の日江戸より藩主の書状が到着した、昨年末において百姓より出された三十ヶ條を一蹴した藩主正倫は、強硬手段を取りその結果が再発という事態となって、遠藤弁蔵の進言による処置では、かえって事態の悪化を招来することを認識し急拠その要求に対し可能な限り受理することで、郡中各村々え郡奉行より三十四ヶ條が申渡された。二月八日には、一揆も少し静まって、出張っていた役人も引取る様命が出た。九日江戸において遠藤弁蔵は、元締役、取締役を免ぜられ、格式は今迄通り士分のまゝという処置がとられた。このことについては、二月十六日正倫が、国元大目付えの書状の中で、次の様に状べている。

◎ 阿部正倫書状（天明七年）備後護国神社蔵

以書付申遣候、何も無事一段之事ニ候、其表城内外家中町場静謐之段承知候 旧蠟以来百姓共強訴徒党及騒動候一件、追々申越具ニ承知候、一躰不屈至極ニ候得共、先達ても申遣候通り、第一ハ三浦庄二弟山本弁助・栄明寺其外家中 順出候者領分内にも以前勝手へ懸候者共、兼々当時之嚴重之趣法追々勝手様子立直候を、銘々会稽之恥を雪かんと工ミ候事ニ相違無之事与存候、第一ニ遠藤弁蔵義を申出候段、彼等が意恨ニ無相違候、多年恨を含候而之事ニ存候、弁蔵義郡中取計不宜趣申越承知候、是者先年阿部内匠・新居頼母其外役人共懸り勤候砌之様成、銘々私欲在中町場へ度々用銀等申付候様成、当時趣法者無之候、弁蔵義為第一ニ存込取計候得共、下方へ困窮者不申付候、夫故下ニても勝手ハ出来不申候、万端吟味ニ吟味嚴重に洗上候間、下方ニて我儘者出来不致候、右ニ付愚者第一ハ三浦庄二一族恨之義者殊外訳之有之事ニ候而、其方共之存候事ニハ無之、庄二田沼主殿頭ノ勤候節 段々訳之有之事、山本弁助を取立候も訳之有之事、他参申付栄明寺を逼塞申付も大分之訳合有之ニ候、夫彼恨を合百姓へ

弁蔵事をあしく申合メ人氣を騒立候ニ違無
之候得共、此度之通り不法ニ相成理非不分
様ニ成行候而者、何分先何を差置候而も静
謐第一ニ取計外無之候間、弁蔵義いか様ニ
も敵敷咎可申付候、夫にて百姓者納り可申
候、扱此後勝手向宜敷取計候者有之間敷
候、又々先年之通り家中渡方等迄も難渋ニ
及候事与存候、弁蔵義格別ニ出情取計候故、
重き役人を初以前未熟成取計いたし候者共
者下々迄もそねみ居、能時節与乗合、色々
手を廻し騒動之手伝いたし候事与存候、迎
も及大變之上之事ニ候間、弁蔵一人之儀ニ
て大勢之庄屋等家財を崩され及難義候段、
不便之事ニ候間、弁蔵義ハ随分百姓共之た
んのふいたし候様敵敷此度申付候、領分
之百姓騒動および候大名数多前々有之候間、
御届も出候例随分有之間御届いたし候、他
領へ越候迎も領分之百姓を他領ニ而取上候
事ハ有之間敷、留置申来候事与被存候、先
々弁蔵さへ敵敷申付候得者一統安堵与存候、
郡中取計あしく候故事起候与申事ニハ無之、
か様ニ不法ニ成及騒動悪者腰押いたし手ニ
余候上ハ、弁蔵取計あしき与落候外無之候、
此上誰へ申付候而も為いたし候ものハ、右
之通末之者意恨そねみニ逢突崩され候が福
山之人氣之風義ニ候、其方共も其地出生
之事にて候得共、前々右之人氣故勝手直候瀬
者無之候
一此度愛許同役服部半助差立、此度之騒動
ニ付申合遣候而郡中へも利害爲申聞候、無
程差立可申候間其通可心得候、何も早
々申遣候、以上

備中

二月十六日

大目付へ

尚申入候、弁蔵さへ退役いたし候得
者、申分無之事与存候間其通申付候、
百姓ニ何も困窮無之者眼前之事ニ候、
関東筋にて百姓家之有之ハ少く漸々
藁を粉ニして給候者多く候、領分
之百姓ニ其様成者ハ一人も有之間敷、

却而悪党共⁶金銀を貰候而人数ニ加
り騒立候事ニ存候、能々何も勘弁い
たし可申合候、以上

山本弁助・栄明寺（府中）や家中で弁蔵に
恨を持つ者などが、百姓を扇動して、会稽の
恥をそゝがんと、たくらんだことであって、
弁蔵は藩のため、私の為第一に取計ったもの
である。然し理由は如何にあるうとも領内静
謐が第一なので、此の際弁蔵を敵敷処分す
ることにより、百姓が納まる様にしなければなら
ない。この様に悪者が腰押して、事態が手
に余る様になったからには弁蔵が取計が悪か
ったと、弁蔵を悪者にして、百姓共がたんの
をする様に処分するより外に手段はなく、弁
蔵を退役さすことにした、と述べ、弁蔵は功
労者であるが、彼に全責任をとらして此の場
を治める様指示している。三月七日弁蔵の士
分格式取上げ、四月九日隠居仰付、嫡子午之
助格式七人扶持にて相続、寛政元年（1789）
弁蔵は一揆の全責任を負わされ、罪人として
指籠にて江戸より国元に送られた。この件に
関して、中井俊三が国元より江戸に受取に行
き、囚人弁蔵を護送した道中役日記が残され
ているので、その一節をかゝげる。

遠藤弁蔵に関はる、亦百姓一揆に関する多
くの文献史料を見ると、天明一揆の元凶と
いわれる弁蔵も、輕輩ものが出世主義にとり
つかれた結果、藩主に対する忠誠心を発揮し
た結果であって、その時代の体制の中におい
て、中央政権の権力機構に身をおこうとする
藩主の、運動展開の中に巻込まれた家臣団の
悲運の人物であった。然しその体制の中にお
ける財政担当者として見た時、一面では優秀
な能吏とも見ることが出来、弁蔵という人物、
誠に哀れな体制の中の犠牲者ともいわれるも
のである。

◎『中井家文書』

口之上覚

今般囚人弁蔵相繩江戸表去月廿二日出立仕

去ル四日大坂表着候様御座候処、去月廿六日府中宿江罷越候処、大雨洪水ニ而安部川差支、通路無御座候ニ付、同宿江同日、当月二日迄逗留仕、同三日安部川明キ候ニ付、前日迄、差出、同日府中宿出立仕、藤澤駅江罷越候処、大井川洪水ニ而去月廿六日引統差支居、橋岡駅殊之外差支候趣相聞候間、藤枝駅江泊申候付、同四日大井川明キ候ニ付、藤枝駅出立仕、大井川□境下々迄、無滞金谷駅江渡越候処、直ニ川留リ船乗下、荷物計川向江残り候ニ付、金谷駅問屋年寄下嶋弥八郎と申者江及示談候所、取計方も可有御座旨申候間、相頼置定宿義申付候処、三波屋半藏と申者方江申付候間、罷越居候□、八時半時過同駅本陣柏屋三郎兵衛と荷物参り居候旨申来候間、取寄相調候処、無相違候間、直ニ出立可仕候処、彼是手間取、晩景ニ相成候ニ付、同駅泊申候ニ付、同八日雨天ニ付、桑名江之通船無御座候旨官駅御用達大森□左衛門早朝罷出申□間差掛り先□差出佐谷□廻り右佐谷廻り万端川船渡之届候、私乗下荷物附居候川中ニ而釣水中江落入荷物不残水入ニ相成候間、神府本陣溝口官九郎と申者方ニ而仮成始末仕、直ニ出立仕桑名駅江七時半時宿仕、同十日坂之下駅出立仕、土山駅江罷越候処、松尾川出水ニ而橋落通路無御座候旨、問屋ニ而申候間立宿之義此処北国屋伊右衛門と申者方申付候、八時比仮橋出来通路相成候旨問屋と申来候間、直ニ出立仕御意法も相頼、其外大坂御屋敷江八日迄、去ル十二日辰刻差仕□□乗船可仕候、船荷物場ニ手間取申刻乗船仕、船中無難今廿三日卯中刻着船仕候、尤囚人弁藏道中ニ而菟角食事仕兼候得共、気分ニ替り候儀無御座候、此度御達申上候 以上

五月 中井俊三

覚

一小田原提灯
一五拾 提

壹張
生蠟燭

右者囚人弁藏福山表江被遣候ニ付 道中為人用相渡候様御達申上候 以上

四月九日 中井俊三

五月六日

浜松宿六時出立いたし候 無坂渡船之節、口出入舟役人茗荷屋清兵衛と申者罷出万端世話いたし候間及挨拶組列江之

上使戸田隠岐守様へ同所御廻船ニ付氏間取新居駅へ四つ時迄着船いたし候処御出入紀伊国屋弥左衛門罷出致世話囚人相図居四番所前江目 為□□者御番所江罷越椽側ニ居候足輕杯之もの江

同九日

一左之通太田氏を以、及御達候処、用意金拜借金之分取置候様被仰聞則取置及御達候 覚

一金七兩

右者囚人弁藏此度福山表江召連道中有之義者、十人目付江被仰付候得共、長途之旅行無心之奉存候付 為用心金右之通拜借仕度旨纏被越候御役下中井俊三相願候付 此段御達申上候以上

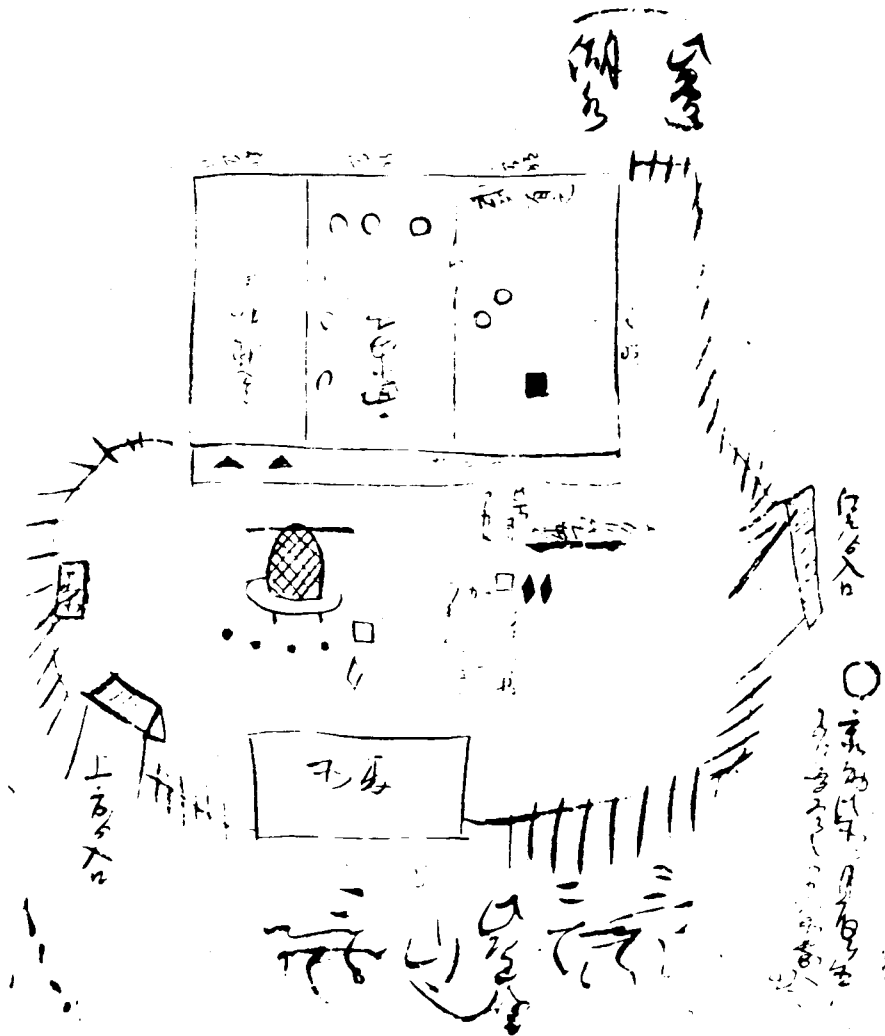
四月九日 森戸金七郎

此用心金文化五年之節 申送帳ニ拾五兩相渡り候事ニ八木八十三郎と申達置、其後拾兩之事ニ極り居候処 尚又出立前ニ相成七兩ならでは難出来旨御元々矢嶋 仲と申聞、其地ニ而出立、其後も七兩ニ而罷越己ニ此度も七兩ニ而罷越

御名内姓名相名乗候処、阿達へ相通候様申候間、草り取ニ刀を為持置中之間面番江上り御名内姓名囚人老人相図居備後国福山迄罷越候間 御証文持参いたし候旨申出御証文差出候処 被相改候上 居候様被申候間又候面番下り同心象脇ニ相居候処 足輕様之者兩人罷出相改 而被罷出候様被申候間己前之通面番江上り候処 御証文之通相違も無之ニ付被成御通候様ニと挨拶有之候、番頭姓名承知五味六郎左衛門受取候被申候間、御退散候ハと相図居罷出候

- 只身士
- ▲ 南島呈控
- 初考
- 丁介
- 家室
- ◇ 後者
- ◆ 流石子

身心



三原史跡めぐり

“失われた遺跡への哀愁・古を偲ぶ”

その1 山陽街道に沿って (3)

末森清司

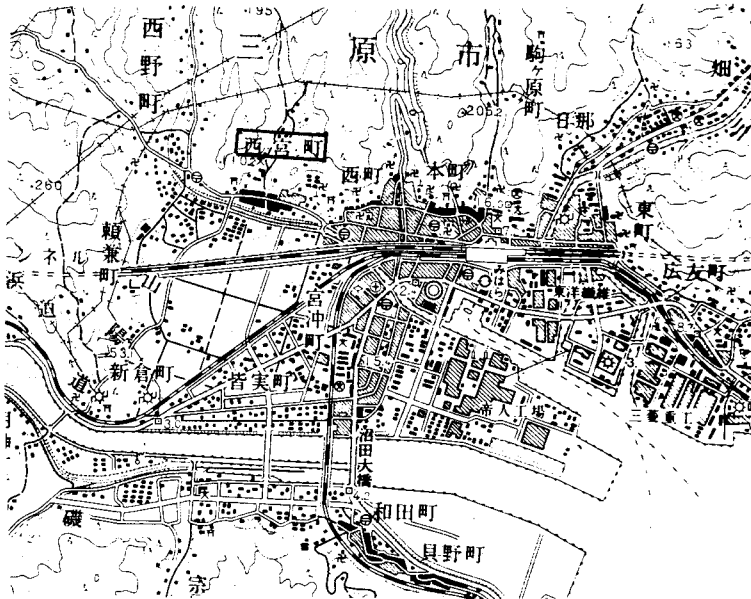
● 茅町

三原にあった古い市場町

三原市内本町より西町通りの旧山陽道を、西へ進むと北側山手に、三原八幡宮（西の宮神社）の大きな鳥居と石段がある。このあたりから山陽街道沿い祇園社（八坂神社）の石段下あたり迄の町筋が、現在は西宮町と町名が変っているが以前は「茅町」と呼ばれていた。

年輩の方々が今でもこの西宮町を呼ぶ時は、以前の茅町という言葉を出す位古くから伝わる地名でもある。この街道沿いの北側にある小浦の谷（西小学校のある谷）からは縄文時代の遺跡が発見されており大昔よりこのあたりには人が住んでいた。この地は北は山が連なり南側は今の道筋近く迄海であり、冬は暖く生活し易い所であった様だ。

この地に市がたち、町として発展していったのはいつの頃か分らない。古文書によると、古くから市がひらかれ船の出入があり色々な物資の交易が行われたと記されており三原の海沿いに出来た一番古い市場町ではなかろうか。中世の頃、山陽街道がこの茅町を通っており、人々の往来もかなりあったであろうから、市場町と同時に宿場町の役割も果していたかもしれない。古文書によると茅町には東から、板屋市・五日市・七日市と三つに別れておりそこに定日に市が開かれ次第に町として発展したと記されている。この町が往時栄えた証として、この頃市場町として栄えた土地には必ず祇園社がまつられており、茅町にも町筋の西の端、山麓に祇園社がまつられ今でもこの町内の人々から大切にされ毎年おまつりがなされている。



西宮町附近 (1:5万 三原)
(茅町)

往時、茅町から木材や塩が船で積出されたとの伝えがあるが今の町の姿からは当時の栄えた面影は見いだす事は出来ない。茅町の事を記した古文書は以下のものがある。

- 「三原茅町差出張。寛政四壬子年」 (1792)
- 「国郡志編集御用諸品書出・文化十一申戌年」
- 「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳・文政二年」

これらの古文書から当時の町の様子を見ると市場町としての姿はみえないが参考として転記しておく

◎寛政四壬子年 「三原茅町差出帳」 二月 覚

一、惣家数五拾八軒 内 | 式拾六軒 上手
三拾二軒 沖手

内

一、壹軒 社人居宅

一、壹軒 鍛冶本役家

一、壹軒 大工居宅

一、壹軒 桶屋居宅

一、五拾四軒 | 商売人 居宅
作人

一、籠数 六拾八

右之外

一、明屋舗 六ヶ所

一、火除 六ヶ所

一、茅町分間数 五町三拾四間 | 西野境と
西野村境迄

内

式町三拾九間半 町内

式町二拾六間 西町境と茅町東之端迄

比分並木松三拾三本 内 | 式拾壹本 上手
拾貳本 沖手

式拾八間半 茅町西之端と西野村境迄

比分並 松三本 内 | 壹本 上手
貳本 沖手

一、祇園社 壹ヶ所 但シ西野村地之内ニ御座候

以下略

◎「国郡志編集御用諸品書出」「文化十一 申戌年」

一、丁間五町三拾四間 但町内井前後共

式町三拾九間半 町内

式町貳拾六間 西町端と茅町東端迄

式拾八間半 茅町西端と西野村迄

一、家数五拾棟

籠数六拾三軒 内 | 五拾七軒 商売人 作人居宅
壹軒 社人
貳軒 大工

壹軒 桶屋
貳軒 鍛冶屋

一、惣人数百四拾四人 内 | 七拾五人 男
六拾九人 女

一、男牛四匹

一、祇園社

右社西野村土地之内ニ御座候得共、建物修理ハ茅町 仕来申候、六月^{七日}十四日ニ西町地方江御幸神事御座候而、同所^石笠鉾通り物ヲ出販ヒ申候、九月十四日者祭礼規式ニ而御幸者無御坐候得共、神酒御供備、社家中 執行申候

一、惠美須三社

下壹社 | 当時七日市伊左衛門方家内之胡ニ
拜ミ居申候

中壹社 | 当時貞七与申者居申家ニ祭居申候、
右貞七相果明家ニ相成申候

上壹社 | 当時友藏与申者之門ニ小社御座候
而、茅町中^と祭等仕尊敬仕居申候
右茅町三町繁昌仕候節、町毎ニ祭申候処、
当時如是

一、往古茅町三町二分、目代三人ニ而支配仕居申候由

東ノ端 | 板屋与申家目代仕居申候処断絶仕
板屋市 | 候

中 五日市 安田屋右同断

西ノ端 | 当時森田屋伊左衛門方ニ而、今ニ
七日市 | 相続仕申候、夫故ニ同人方七日市
与申候 屋号之様ニ相成申候

右茅町開発等之儀、年数相分り不申候得共、当時之西町井宮沖新開等開ケ不申内ハ、船なども着繁昌仕候ものと相見、今ニ少々宛其形相残居申候、其節^(記)之書紀等茂段々穿鑿仕候得供一円無御坐、外ニ古物類無御坐候
以上略

江戸時代後期頃に記されている茅町と往時市場町として栄えたと思われる様子とは大きな違いがある。江戸時代の茅町は山陽街道に沿

って戸数63軒、人口150人前後のちいさな在郷町である。町並での商いをみると、草履、わらじ、縄類、場酒、餅菓子などである。市場町として栄えた頃の茅町の戸数、人口はどの位だったのだろうか。何の記録も残っていないので分らない……。この茅町は江戸時代に入った頃は市場町としての機能は完全に停止してしまっただけではないか、その理由として

(1)茅町は西野川河口に当り又沼田川河口の影響もあり、両川の流す土砂の堆積により沿岸部が段々と浅くなり船の出入りがむつかしくなった。

(2)小早川氏が本郷にある新高山城から三原に城を移し城下町を作った。城下町を開くため本市(現沼田東町本市)、新市(理長谷町萩路)の商人及び住民を呼びよせたと伝えられている。(そのため本市、新市はすっかりさびれ今はわずかにその道すじのみを残し田畑となっている)。茅町の商人たちも、三原城下町の方へと移行したのではないか、そのため市場町のにぎわいはなくなった。

(3)江戸時代に入り各地で新田の干拓が行われた。三原城下でも前の号で書いた頼兼新田、横山新田、そして宮沖新田の干拓を行ったため茅町町は市場町としての役目は完全に終わってしまったその後は古文書に記してある町の姿となって今に至っている。茅町は西宮町と町名を変え商店が並び人家が建ちにぎわいのある町として発展しつつあるが、古の面影はどんどん消えて行く。わずかに祇園社の江戸時代に建直された社殿拜殿と江戸時代の山陽街道の道すじのみが古を偲のみである。
*「茅町」…「かやまち」と書いてあるが私たちは「かいまち」、「きゃあまち」と呼んでいた、本当の呼名は分らない。この茅町としての地名の由来は今の所筆者は調べてないので分らぬが機会があれば調べてみたいと思っている。

◎ 船津 三原海沿いの古の船着場と伝う

今の西宮町を通っている旧山陽道が西野川にかゝる梅観橋を渡り頼兼土手筋へ南へ向う三叉路のあたりが往古「船津」と呼ばれた地名があった。梅観橋バス停より10メートル西野町へ行った所の道路の山側にお地藏さんがまつってあり「船津地藏」又は「船津のお地藏さん」と呼ばれているところからも往時の地名が偲ばれる。「国郡志書出帳」によると昔はこのあたり船着場であったと記されており「茅町」が市場町として栄えていた頃このあたりが港としての機能を果していたのかも知れない。

「三原昔話・白松克太著」によると、往時この船津は三原海沿の所でいちばん最初に出来た船着場で荷物の積みおろしをしていたと言われている。船津地藏はこの船着場の傍に1本の大松が生えておりこの下にこの尊像がまつってあったとの事である。

こゝから頼兼の荒神さん(近江堂)の所への渡しがあり渡し舟が通っていた、その松のふもとにあった石に渡し舟のともづなを結んでいたとの事である。古文書によるとこの頃の往還はこの船津の渡しから頼兼の荒神さんの岸につけ、そこより頼兼山の裾を通過して大串の谷より山地へ入り迫の谷を越えて木之浜へと続いていた。(この道は昭和30年頃迄はまだ人が通れたが今はうづもれて消えてしまって通行出来ない)。

古文書によるとこの地藏の西の一基の法経塔があったと記されているが今は無い。

古文書に船津の記事が記してあるので転記しておく。

◎国郡志御用ニ付下しらへ書出帳 文政二年、御調郡 西野村

一、村内土地古今相違の様子

古は小西大西川祇園の沖小曲り之上辺ニ而海に入り両谷 其他積荷等ハ、当時法花塔の下船津と申処に而揚積仕候由、小浦ハ谷口に而川海に入り候旨ニ御座候、小浦と申す名も右に寄而の名と申伝候、以下略

一、古跡

古往還

東桜山之後大目木より、西之宮山ヲ越テ下手与申所へ出、湯ユ佐サ近ニ之西ニむろ木之鼻ヲ越へ小浦通り、祇園之西ニ法フ経キ塔ト之下ニ船津、夫より近江堂へ渡、大串山ヲ越テ芸州へ移候由申伝候、 以上略

この船津という所、今はその面影はひとつもない、海岸であり、船着場であったという所は西野川が流れ堤防になっておりそれから南

当時の海は干拓された新開であり今は人家が建ちこみ様子が変わり往時をしのばすものはない。しかし往時の伝えを残すお地藏さんは、今でも大切にまつられてあり地元の人の信仰を集めている由との事。

参考文献 三原市史 第四巻 資料編
三原昔話 白松克太著
三原志稿 他

受贈図書目録(1)

昭和60年7月30日現在

書名	発行年月日	発行者
下伊那の古墳・長野県下伊那古墳調査報告 一 飯田市を中心として一	S 51. 7. 20	歴史民族研究会古代史部会
甲府盆地の古墳・山梨県古墳調査報告	S 51. 12. 13	〃
甲府盆地の積石塚・山梨県古墳調査最終報告	S 52. 5.	〃
古代史講演論集『前方後方墳』茂木雅博	S 58. 5. 10	〃
秩父古墳調査中間報告書	S 53. 11.	歴史民族研究会秩父古墳調査特別委員会
秩父古墳調査最終報告書	S 55. 10. 18	〃
みよし風土記の丘 № 1 ~ 11	S 56. 2 ~ 58. 4	みよし風土記の丘友の会
ひがしひろしま郷土史研究会ニュース № 110. 111 ~ 115	S 58. 11 ~ 59. 3	東広島郷土史研究会
郷土史往来 № 3. 4	S 55. 3	松永湾郷土史会
〃 № 5. 6	S 57. 3	〃

坪生たずね歩き	S 57. 11	つぼう郷土史研究会
山梨県大泉村 御所遺跡 — 第2次発掘調査報告書 —	S 56. 5. 5	山梨大学考古学研究会
宮内下地域	S 57. 3. 31	郷土文化財研究会
もとやま 2～7号	S 57. 9～60. 5	本山町郷土史会
備後風土記	S 58. 3	福山電報電話局郷土史研究会
御調文学 No. 18	S 58. 12. 28	御調町教育委員会
神石町山城分布調査書	S 58. 3	神石町教育委員会
赤坂町史巻番組編	S 58. 4	宮宗正人
歴史研究広島 第4～6号	S 59. 12 ～60. 7	広島備南歴史研究会
赤坂の文化資料	S 60. 3	赤坂公民館
神石町古墳分布調査書	S 59. 6	神石町教育委員会
福山市文化財年報 19	S 58. 8	福山市教育委員会
〃 20	S 60. 1	〃

編 集 後 記

原稿を受け取って編集作業を始めたのは2月、あれからすでに半年の月日が経過してしまいました。発刊予定も、4月、5月、6月と伸び伸びになってしまいました。弁解は申しませんが、雑誌の発刊の難しさをつくづく感じる今日此頃です。

さて、今回巻頭には古墳部会の皆さんの汗の結晶である測量報告を載せることができました。元々、本誌は部会の研究発表の場として企画したものです。その1号論文を載せることができた今号は「山城志」の真のスタートと言うべきでしょう。今後共古墳、城郭、更には歴史民俗研究部会の研究成果をどしどし掲載して行きたいと思っております。御期待下さい。

又、今号には森本、平井両先生の王稿を始め、多くの方々に原稿を寄せていただきました。文末ですが御礼を申し上げます。

(6.30 Y.T)

備陽史探訪の会古墳・城郭研究部会紀要

——山城志 第8集——

1985年8月11日

編集 備陽史探訪の会古墳・城郭研究部会

） 広島県福山市多治米町916
発行 田口義之方TEL0849(53)6157

印刷 塩出印刷所
広島県福山市引野町1丁目316
TEL0849(41)0970
